

このビッチな女神に祝
福を

nyasu

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

このすばにもしやバい信仰の女神がいたらと考えぶち込んだ作品。

結構ピーキーなインチキ効果を持つてますが自分じゃ扱いきれない感じの駄女神な予定。

なお、相変わらず衝動に任せて書いてる。

オリ主とか受け付けない人は無理かも知れない。

目次

名前も呼べない女神に定職を	1	魔剣の勇者に容赦を	112
貞操観念の弱い女神に先輩を	10	ハーレムパーティーに悟りを	122
水の女神に温もりを	22	このリッチーに浄化を	130
冒険者にエロ魔法を	33	負け確定イベント、相性ゲーとか糞だわ	139
大きいカエルにステラあああ！を	41		
この女騎士にお祈りを	51		
上級職に下克上を	60		
キャベツ達に収穫を	70		
デュラハンにゲーム脳を	79		
アンデッドに真理を	90		
湖に浄化を	103		

名前も呼べない女神に定職を

お前を転生させてやる、何でも願い事を叶えてやるよ。

なんて事を一度でも言われることを想像したことが無い奴は、あんまりいらないだろう。

少なくとも二次創作やらネット小説を読んでいる奴の中にはあんまりいない。

そんな状況が訪れてしまった場合、人はその場のノリと勢いに任せて『ぼくのかんがえたさいきょうのちーと』を所望するだろう。

その相手が、例え邪神だろうとだ。

「俺を神にしてくれ、エロい事とかして、働かないで生活したい！好待遇の神にしてくれ！」

「喜べ少年、君の願いは叶う」

その時に笑った顔を人は愉悦というのだろう。

ゆさゆさ、ゆさゆさ、そんな効果音が聞こえるくらい優しい感じで身体が揺さぶられる。

何と言うことだ、朝がやってきたという絶望感が俺を襲う。

そんな俺に対して、幸運の女神様が言うのだ。

「後輩ちゃん、朝ですよ。いや、時間の概念とか超越してるのですが一応朝という設定の時間ですよ」

「働きたくないでござる」

「最初に言うことがそれえ!」

朝からまたあの夢か、忘れた頃に思い出すような呪いでもあるんじゃないかと転生される直前の光景を見て憂鬱になった『私』は目を覚ます。

かつて男であり、哀れにも邪神に弄ばれて、そして今も邪神が作ったかのように創作の世界のようなところに転生した『俺』は目を覚ました。

それはとても奇妙な感覚だ。

紛れもなく生まれた世界であり現実であると認識している『私』と、創作の世界に転生したと認識している『俺』が同居しているからだ。

「おはようございませう、せーんぱいっ……」

「くっ!」

「どうしたんですかあ? 胸が痛いんですかあ?」

突然胸を押さえる先輩である、幸運の女神エリス様に俺は自分のゆっさゆっさ揺れる

胸を強調しながら首を傾げた。

なんですか、そんなに胸を凝視して怖いです。

いや、私も望んで手に入れたわけじゃ無いですけどあれば不要で無ければ必要ですよ。ね。

「な、ななんでもないですよ後輩ちゃん」

「顔が引き攣ってるんですが……もうっ、しようがないですねえ」

「きやあああ!?待って、待って何がしようがないの!」

ああ、もう可愛いなと私の中の男が言う。

そうですねと、私の中の私が言う。

やりたいこととやるべきことが一致したとき、迷わず行ってしまおうが吉。

ということなので、私は彼女を抱きしめて布団の中に引きずり込むという選択肢を選んだ。

「わー、わー、誰か!」

「安心してください先輩、私ってバイなので女の子も大好きです」

「安心出来ませんよ!?!待って、服に触らないでえ!」

あと少しのところで騒ぎを聞きつけた天使に邪魔されたが、泣き顔のエリス先輩は可愛かったです。

改めて、起こされた私は今日のスケジュールを確認する。

ふむふむ、どうやらイベント中らしいのでスタミナ管理しながらゲームしなくてはいけないな。

「こらあ、サボっちゃダメなんですよ！」

「また来たんですか、せんばあい」

「働かなきゃダメですよ。いいですか、仮にも女神なんですから——」

「やめてください、死んでしまいます」

私の部屋にやってきては、なんだかんだで面倒を見てくれるエリス先輩に恐ろしいことを言われる。

何故なら、『俺』が転生して生まれた『私』は酷い担当属性の女神だからだ。

その属性故に、何というか駄目人間……いや駄女神なのである。

「もう、そんなんだとアクア先輩みたいになっちゃいますよ」

「なんだかんだハイスペックなアレと一緒にされても困る」

「アレ呼ばわりとは、何したんですかアクア先輩」

「悪気なく貶されました」

嫌なことを思い出した私はぐてえーとベッドにダイブした。

ありがとう、いつも優しい包容力溢れる布団君。大好き、抱きしめて。

「ああ……で、でも自分の事だし誇りにしても良いと思います！」

「じゃあ先輩、私の名前とか役職？言ってみてくださいよ」

「えっ!？」

「やっぱり言えないんだ。もうやだ、働かない」

「言うからっ！言うから、働こうよお！」

そう言つて、先輩はモジモジしながら小声でボソボソ言う。

その姿は可愛いけど、人の名前を恥ずかしがるなんて失礼な。

「先輩っ、人の名前を恥ずかしがるなんて失礼ですよ」

「ご、ごめつ……待つて何で怒られてるの!」

「ほら、早く言つて!」

「……ロースちゃんです」

「えっ? 誰が肉の部位だつて?」

「エロースちゃんですっ! 何これ公開処刑!？」

顔を真っ赤にして、プルプルしながら羞恥に混乱する先輩の様子を私はばっちし録画していた。

そして、後日それを動画サイトに投稿していたことが分かつて怒られるのだった。

改めましてこんにちわ、駄女神ことエロースちゃんですっ！

そんな私は、珍しく仕事をしていた。

「はあ……鬱だ」

「あの、すみません」

「なんで私、働いてるんだろう。はあ……」

「えええええ!!」

それはそれは大きな玉座にて、私はだらけていた。

無駄に大きい胸を肘掛けに載せて、私を見てわたわたしている迷える魂を見守っていた。

仕事、仕事しなきゃ……説明がダルい。

「あの、ここどこですか？私は一体……」

「これ、あげる」

そうだと思つて、私は自分の能力を使って作り出した紙を渡す。

渾身の出来である、もう働きたくないくらいである。

渡された迷える魂ちゃんは渋々読み始めてくれた。

「じゃあそういうことで」

「働いてよ！もつと、お悔やみ申し上げますとかあるじゃん！何ですか、これ！ごめん死んじやったから特典選んでね、なんだよこの最初の一文！キャラも違うし、軽いわ！」

「ねえ、疲れない？」

「お前のせいだああああ！ふーぎけんなあ！説明も天国でニート、普通に転生、チートで異世界転生とか雑なんだよおおお！」

「分かりやすいと思うんだけどなあと、同じベクトルでも仕事が出来るアクア先輩を見習いたくなる。」

「ごめんね、私つてばこんんで仕事できないでさ。」

「でも、やる気はあるっっちゃあるんだよ、一応これが全力なんだよ。」

「人より、全力の値が低いだけで頑張ってるよ。」

「他の人、他の人はいないんですか？」

「前任者は特典に選ばれてしまって、急遽配属された感じなの。ごめんね、人手不足で」

「もつとマシな奴いただろおおお！」

「私の作成した説明書をパアンしながら、迷える魂ちゃんが荒ぶっていた。」

「いるにはいるけど、天使だしな。女神以下だから、動ける女神は私だけなんだよね。」

「なお、恐らく役職だけで天使の方が働ける模様。」

「他は私以下だよ（役職的な意味で）」

「私以下!?(実力的な意味で)」

「そうそう、まあ腐つても女神ですし……ダメな先輩でも洪水起こせるレベルだし」
「なにそれすごい」

事実、水の女神なら余裕ですしね。

えっ、その先輩を呼んでくれ?

「ごめんなさい、その人前任者なので異世界なんです……はあ」

「マジですか」

「でも異世界オススメ、魔王倒したら願い事なんでも叶うから……ふう」

無理、エロ動画みたいよゲームしたいよ。

もうゴールしてもいいよね、休んでもいいよね。

「なんか適当にチート選んで、何でもいいから」

「んっ?今、何でもって言った?」

「淫夢厨乙」

「決めました!私の特典は、貴方です!」

ビシイつと、迷える魂ちゃんは私を指さして宣言した。

えっ、えっ、なにそれ聞いてない。

アクア先輩ルートにいつの間に入っていたのだろうか、まって前例があるから……。

「貴方の願いは受理されました。これより新たな世界に向かっていただきます」

「天使ちゃんマジ天使。なんて事だ、天に召される系じゃ無いですかヤダー、こんなところにはいられるか帰らして貰う」

「ちよ、それ死亡フラグ！」

願い事が受理されて、私と迷える魂ちゃんの下に光が溢れる。

そう、異世界に飛ばされる前兆である。

エアコンとネットがない異世界なんて地獄に行つてたまるか、そう思つて抵抗するも両足を捕まれた私はビターンと顔面から倒れ込む。

「痛ったああああい！顔がああああ！」

「あつ、やばつ」

「あの、今あつて言いましたよね？なんで目を反らすのその天使！こつち見ろやあ！」
てへつと小さく舌を出す天使を最後の光景に、私は意識を失つた。

貞操観念の弱い女神に先輩を

チュンチュン、チュンチュン、そんな小鳥の囀りが耳元で聞こえた。

朝チュン、朝チュンなのか！これが例の朝――。

「しやあああ！異世界だああああ！」

「ああ、現実が襲いかかってきた」

もう駄目だ、お終いだーと項垂れてる私の横でどこかの海賊王を目指している男のよ
うに両手を挙げて叫んでる女がいた。

私を特典に選んだ迷える魂ちゃんである、名前は調べてなかったので知らない。

「さあ、女神様冒険よ！最初は何をしたらいいの？」

「その前に、不具合とかがありませんかね？」

なんか、ヤバめな雰囲気醸し出すような異音が発生していたんですが、恐らく記憶
障害くらいはありそう。

一番酷いと肉体がゲル状になったりするけどそれは無さそうなので一番有力だろう。

「不具合？何それ、そんなのありません……」

「ああ、やっぱりありますよね。てへっ、とかあの野郎言っていましたもんね」

「待つて待つて、名前が思い出せない！私の名前って何だっけ？」

「知りませんよそんなの、迷える魂ちゃんって呼んでましたから」

「ええええええ!!?ちよ、ふざけんな!どうすんの」

それは、まあここで新しい名前を名乗るのはどうでしょうか。

例えば、ああああとかそういう名前にするとか。

滅茶苦茶強くなりそうな名前ですよ、勇者ああああとかね。

「まあ、第二の人生ですし名前だけで良かったじゃないですか」

「名前っていうか、前世の記憶が殆どないんだけど!」

「セーフですネ」

「アウトだよ!限りなくセーフに近いアウトだよ!」

でも死んでないですし、死ななければ安いので問題ないと思います。

それにしても、周囲の視線が辛い。

ああ、外とか怖いし日差しがキツイ、休みてえ……。

「もう、この際名前はいいわ。ナナシとでも名乗ることにしましょう」

「そうですね」

「それで、さっきの話だけどうすればいいの?女神様、サポートしてよ」

「すいません、部署が違うのでこの世界の事とか知らないです」

「……………えっ?」

正直、仕事できない。

私が事実を言うと、彼女は固まってしまった。

数秒のフリーズ後、再起動した彼女は私の両肩を掴んだ。

そして必死の形相で前後に揺らし始めた。

やめてください、死んでしまいます。

「どー言うことよ! アンタ、女神でしょ! なんて、サポートできないのよ!」

「あうあうあう、揺らさないで下さい」

「じゃあ何が出来んのよ、これからどうすんのよ!」

「取りあえず、街でも目指せばいいんじゃないですか」

「そしたら、膝に矢を受けてしまった衛兵さんに遭えるはずなので、とイベントを進めることを提案してみた。」

そして、私たちは道なりに進むことでアクセルという街にやってきた。

始まりの町アクセル、ここはなぜか駆け出しなのにレベルの高い冒険者のいる不思議な場所。

そんな紹介をされながら、私たちは足を踏み入れた。

「まずは冒険者に登録するといいつて聞いたわ。行くわよ、えっと」

「キラキラネームなので、えっちゃんと呼んでください。本名は死にたくなるので」
「因みにどんな名前」

「エロースです。いや、実際エロいですけどね」

「それは……なんというか、まあ神様だしありっちゃありなのか？うーん」

正直、なんでこんな名前ののか教えてほしい。

名前のせいで、私はエロエロなんだからな。

神様ってイメージに左右されて、性質が決まっちゃうんだからな。

まあ、そんな悩みを頭の片隅に放り投げながらも冒険者ギルドにやってきた。

ギルドに入るとさっそく知らないオッサンから、ようこそ地獄の入口へと強面な方が案内してくれた。

受付を案内してくれるとはいいい人である。

「冒険者登録には千エリスが必要です」

「えっ？」

「えっ？なにそれ聞いてない」

迷える魂ちゃん改め、ナナシちゃんが受付嬢に突っ掛かっていた。

そうか、お金を取るのか。借金する形で登録とか、あつてきないですかそうですか。

「ねえ、ちよつとエロ……えっちゃん！お金持つてる」

「持つてないです。なので、ちよつと稼いできます」

「えつ、どうやって?」

「あその酔っぱらいを路地裏にでも誘い込んで」

「まさかのカツアゲ!」

「ちよつと、火遊びついでに寄付をして貰おうかと思ひます。任せてください、これもサポートの一環ですからね」

「それつて、ちよ、おま!?ダメだろ、何しようとしてんだ!」

大丈夫です、初めてですけど知識はあるのでいけます。

千エリスと言わず、数万エリス稼いできますよ。

「待つて待つて、罪悪感がすごいことになるから早まらないで」

「私は犠牲になるのではない、未来へ礎になるだけです」

「かつこいい風にまとめないで、やろうとしてることは頭おかしいから」

良い案だと思つたのだが、ナナシちゃんの全力抵抗により断念せざるを得なかつた。

仕方ない、こうなつたらあその老人辺りに貸してもらおう。

移動するだけで何故か警戒するナナシちゃんを背後に、私は優しそうな老人に話しかけた。

「すみません、エリス教徒の方ですか?」

「そうですが、貴方は」

「実は私達遠くから来たところでお金がないので貸してもらえませんか。なんでもしますので、お願いします」

「ちよ」

後ろでナナシちゃんが驚いているが、別に問題はなかった。

老人は、女性がなんでもするなんて言うもんではありませんよと言いながら二千エリス貸してくれたからだ。

やっぱり頼るべきは先輩の力だって分かんだね、本当にエリス教徒は最高だぜ。

ともあれ、無事にお金を手に入れた私達はさっそく登録することにした。

「それではカードを……えつとナナシ様は普通のステータスですね。これだと冒険者しかなれませんよがよろしいですか」

「えつ、冒険者登録なので冒険者ですよね？」

「ああ、ジョブの冒険者にしかなれないという意味です。最弱職となってしまうですが、色々なスキルを覚えられますよ」

「へえ、そうなのかい」

じゃあそれだと、気軽な感じでナナシちゃんは承諾する。

お姉さんが再三に渡って本当にいいのか聞いてくるのは心配だからだろうか。

次に、私の番がやってきた。

「こ、これは……!?!」

「えっ、やっぱりえっちゃん腐っても女神だし強いのかな」

「魔力と知力以外は人並以下、なんですかこのステータスはどうかやって今まで生きていたんですか!?!」

「ええええ……」

「魔力はあるので、ウィザードにはなれると思います。頑張りましょう、頑張っていつか上級職になりましょう」

「分かりましたあ……」

どうです、これでも女神ですよなんてドヤれると思つてた頃が私にもありました。

まさか、人間以下とはなんとという女神の面汚し、もう働きたくない。

むーりいー、冒険とかむーりいーです。

「その、頑張って」

「明日から頑張ります」

「それ、頑張らない奴だよ!」

ナナシちゃんのツッコミが冴え渡る。

すいません声の音量下げてもらってもいいですか、メンタルボロボロなのでキツイで

す。

しかし、ダメージを受けながらも私達は冒険者登録が出来た。

やったね、私達の冒険はこれからだ。

「さあ、依頼を探すわよ」

「ええええええ」

「働きなさいよクソニート、晩御飯代とか借金を返すわよ」

結局、モンスターの討伐はまだやめとけと周りから忠告されたのでギルドでバイトする依頼を受けることにしました。

注文された品物を運ぶだけのお仕事です。

休憩しながら頑張りましょう。

「つて運びなさいよ!」

「セルフサービスです」

「サボりでしょ!」

「違います、お客様に捕まってしまったので仕方なく動かなかっただけです。私は悪くない」

バイトをしていると、目敏いナナシちゃんに注意されてしまいます。

でも、仕方ありません。がちり腰をホルドされてるんですから動けませんよ。

この人誰だっけな、確か名前はダ……ダーなんとかさんである。

取りあえず、胸に顔をつっ込んでおけば注文してくれるいいお客さんである。

「げへへ、もう一杯シユワシユワ頼んじやおっかなあ」

「本当ですか、シユワシユワ追加でお願いします」

「不健全！ 違う仕事になつてから！ 何してんの、こつち来なさい！ 放しなさいよセクハラ男！」

「ああ、俺のおっぱいが！」

名残惜しそうに手を伸ばすダーなんとかさん。

またシユワシユワを注文したら会いに行つてやろう。

「もう、どうしてそう貞操観念という物がないかな！ 浮世離れてレベルじゃないからね、とんだビッチよ！」

「別に胸くらい触らせても」

「ダメに決まつてるでしょ」

減るものじゃないしと思うのは、元男だったからつてもあるのだろうか。

それとも、私の信仰の属性というか権能というかがそつち系だからなんだろうか。

実際問題、司るそれに影響を受けてしまうのは仕方がない。

自分としても、馬鹿にされるから変えたいんだけどなあ。

「はあー、今日も一日頑張ったわ。やっぱり、仕事終わりにはよく冷えたシユワシユワよね。さあ、じゃんじゃん飲むわよ」

「おい、冒険するための土木作業だつてことを忘れるなよ」

「馬鹿ね、そういうことは明日考えればいいのよ。今を楽しむ、それがアクシズ教徒つていう物よ。すいませーん、シユワシユワひと……」

ナナシちゃんの説教中、新規で入ってきたお客さんに呼ばれて仕方なく振り返ると、そこには見知った顔の青い髪の女が固まっていた。

あつ、こえアカン奴だ。

「ねえねえ、もしかしてアンタ！」

「違います、神違いです！」

「いや、絶対そうよ！久しぶりね！アンタもこつちに来てたのね」

「おいアクア、あのすんごいエロい姉ちゃんは知り合いなのか？」

神は言っている、ここは逃げるべきだつてな。

私が言うんだから間違いない、私が神だからだ。

「ちよ、待ちなさいよなんで逃げるの！」

「ふぎやっ！」

しかし、現実是非常である。

ば、バカな！筋力のステータス高つ、なんで力強い先輩なんだこの人！

「おお、黒のTバック。下着までエロい」

「えっちゃん、パンモロしてる！隠して隠して」

ナナシちゃん、それどころじゃないです。

この悪気なく人を不幸にする先輩女神をどうにかしてください。

「無視すんじゃないわよ、こっちは先輩なのよ！」

「神違いです」

「んな訳ないでしょ、才色兼備なアクア様が間違えるわけがないわ。アンタ、『淫蕩と墮落の女神エロース』でしょ！エロいこと四六時中考えて仕事サボってたエロースでしょ！我がままボディでエリスに精神的ダメージを与えてたエロースでしょ！」

やーめーてー、そうだけど公衆の面前で言わないで、ザワザワしてるから！

なにこれ、公開処刑！もう、街から出たいんですけど。

「あー、そういう設定を口走ってる痛い子なんで気にしないで下さい。おいアクア、よくわからんが困ってるだろ。あとは俺がやるから代われ、できれば朝まで二人にしてくれ」

「設定じゃないから！この子も私も女神！女神なんだから！」

なんてことを口走ってと思っていたら、アクア先輩の横にいた男の人の説明に周りの

人間があーと納得する。

すごい、ナイスフオロード。フオロ方さんとも渾名を付けてあげようか。ありがとうフオロ方さん、でもパンツ凝視しすぎい。

「なんだ騒いでるのはいつもの頭の可笑しい姉ちゃんか」

「またいつものアクシズ教徒か」

「あつ、壁塗りプリーストの姉ちゃんか」

「なーんーでーよー！敬って、私女神なんですけどー！」

この広い世界で、何故だか私はアクア先輩にエンカウントした。

水の女神に温もりを

何なんでしょう、リスポーン地点なんでしょうか。

どうしてこの広い世界で局所的に知り合いにあったりするんでしょうか。

「だーうー」

「ねえヒキニート、胸ばっか見過ぎじゃ無いかしら？」

「お構いなく」

「構うわよ！カズマさん、ねえカズマさん！」

「お構いなく」

フオロ方さんの名前はカズマさんというらしい。

アクア先輩を下界に引きずり落とした張本人です。

「つだーもう、うるせえなあ！忙しいの見て分かんないか！見ろ、あのテーブルに押しつぶされた胸！」

「うわあ」

「うわあ」

カズマさんの発言に、女子二名がドン引きする。

なお、男の気持ちも分かる私は寛容なので若いなあと見守っている。

「それで、エロースちゃんも特典としてこっちに来たのか」

「ちよつと頭パーンして記憶が飛んじやつてるナナシちゃんの特典です。あと、名前はあんまり呼ばないでください」

「おいアクア、くるくるぱーになった奴がいるじゃないか。お前、大丈夫みたいなこと言ったよな」

「言つてない」

「く、くるくるぱーって何?」

あーあー、なるほどちゃんと説明責任を果たしたわけですね。

すごいなー立派だなー、私つてば働かないからそんなのしてないよ。

「死んでないから問題ない」

「アンタね! いい加減にしないと、ぶっ殺すわよ! この、このっ!」

「痛たたた、胸が抉れる!?!」

「……尊い」

ナナシちゃんの両手が、私の胸に伸びる。

そして、思い切り驚掴みにされた。

や、やめてください! もっと優しくしてください。

「まったく、相変わらず私よりダメダメよね。エリート私と比べるには流石に可愛そうだけど、もう少し頑張ったほうがいいわ」

「えっ、何だつて?」

「あら、何か言いたそうねカズマさん」

「うん、少なくともその日のうちに日雇いの給料を溶かすお前よりこっちの方がいい気がしてきたよ」

おお、おおおおお!

何と言うことでしょう、アクア先輩を選んだ狂信的な信者だと思っていたカズマさんが改宗しそうです。

これがNTRって奴ですか。嬉しいですが、やったねえつちやん信者が増えるよ。

「ダメダメよ!だつてその子名前だけのなんちゃって女神なんだからね、ただのロリ巨乳ニート処女ビッチなんだからあ!」

「ふるふる、僕悪い女神じゃ無いわよ」

「僕っ娘属性追加してきたあ!?!待って、嘘よね」

「アクアごめんな、お前とは遊びだったんだ」

「カズマさん!待って、見捨てないで!」

私達の様子を遠巻きに見ていた人達がざわつく。

でも、なんでしよう。このいつものアイツらかみみたいな雰囲気。

「まあ、お互い冒険とかまだしてないけどこれからよろしくな。ガンガン頼るから」

「なにこのヒキニート、最初から他力本願なんですけど」

「よろしく願います。具体的に養ってください」

「ダメだわ、ダメな奴が増えてるわ!」

働いたら負けだと思っている。

しかし、アクア先輩の信徒とは惜しい。

すぐくシンパシーとか感じるのにな。

翌日、私達は危機感を感じて冒険することにした。

何故かという、夜中に泊まった馬小屋は死ぬほど寒かったからだ。

バイトなんて悠長な事はしてられない。

「どうよー!」

バーンと二人分のバイト代で拵えた装備を見せびらかすナナシちゃん。

茶色い髪をポニテにして、皮の鎧とズボンを穿いている。

腰にあるのは欠けた刀身を持つ剣だ。

これでイチキュツパである。安い。

「所であつちちゃん、そんな装備で大丈夫か?」

「大丈夫だ、問題ない」

この身は人類を守護せし神の肉体、何を恐れることがあるのか。寧ろ、鎧なんて不要なくらい完璧な肉体ですよ、はっはっはっ。

「そう言えばあの人達もそろそろ冒険とか言ってたわね。同じ依頼を受けようかしら？」

「それがいいです。生存確率が上がります」

恐らく最初はジャイアントトードー、なら多い方がタコ殴りに出来て良いだろう。

カエル程度、敵ではありませんよ。

「よお、奇遇だな」

「おー、カズマさんではありませんか」

「どうだ、形だけでも冒険者に見えるだろ？」

ドヤとカッコつけるカズマさん。

採集クエストとかやってそうな感じですね。

「あー、おはようございませす」

「すごい、君はカッコいい冒険者なんだねー」

「よせよ、照れるだろ」

「ナチュラルにスルーされた!？」

ナナシちゃんがショックを受けていました。

でも分かります、ナナシちゃん可愛いので女子と何を話せばいいか分からないカズマさんは緊張してるって。

これが頭のおかしい奴とか、自分に迷惑を掛けそうな奴ならまだしも、そうじゃないから難しいでしょう。

なお、アクア先輩はノーカンです。

「お、おはよう。いやー今日はいい天気ですね……………」

「あつ、いたいた！カーズーマーさん！何で起こしてくれないのよ！あら、貴方達も冒険かしら奇遇ね」

「ちっ、邪魔が入ったか」

「あー今日はよろしくお願いします、アクア先輩」

「任せなさい！」

「あー、こういうのを見ると一応先輩後輩なんだな……………」

程無くして、約束もしてないのにメンバーが集まったので四人で冒険することになった。

「やっぱリジヤイアントトードーということで、私の魔法が輝くに違いない。

「だーうー」

「大丈夫か？」

そう思っていた頃もありました。

ギルドを出て数分で私はバテた。

くつ、高貴な身だから体力がないのだ。

「まったくだらしのないわね。見てなさい、私の身体捌き。ゴッドブローをお見舞いしてやるわ」

シユツシユツとシャードーするアクア先輩。

じゃあ、戦闘は任せました。

そんな私はカズマさんにおんぶして貰ってます。

意外と背中大きくて安心する。

「ねえ、カズマさん疲れたら歩きますよ」

「んふつ、気にしないでくれえっちゃん」

「そうですかあ？ 甘えちゃいますよ」

「ずっとこうしててもいいくらいだぜ、ふう……」

……なるほど、胸の感触を味わっていると把握。

まるで童貞のようだが、きつとそこら辺をアクア先輩に刺激されてこんな世界に行くことを決心したに違いない。

「カズマさんカズマさん、もし改宗してくれたら何でもしてあげますよ」

「な、なんだって……ゴクリ」

「な・ん・で・も・ですよ」

ならば引き抜きなんて余裕です。

アクア先輩はたくさん教徒がいるから、一人くらい貰っても罰は当たらないと思うの。

「うわっ」

「ちよつと！甘言を労するなんて悪魔みたいなことしないでよ！」

「ま、待て二人とも！俺はまだ何も言っただけだ！」

あと、一步の所で邪魔が入った。

くそお、ナナシちゃんでもいいけどカズマさんの方が簡単に入信しそうだったのにな。

まあ、ともあれ街の外にやってきた。

「アレか、でつかいカエルだな」

「出番よ、えつちゃん！」

ご指名されてカズマさんから下ろされる私。

えっ？えっ？えっ？

「どうしたのえっちゃん」

「えっ、困る」

「何だよ！魔法使いでしょ、遠距離攻撃しようよ」

「私の扱えるのって便利なのとエロ系の魔法だけで戦闘向きじゃないです」

「うがああああ！」

ナナシちゃんがキレた。

頭を抱えながらももうお終いだって感じに落ち込んでいる。

なんだこの地雷女神って具合に混乱している。

でも、戦闘系の神様じゃ無いんですいません無理です。

「ちなみにどんな魔法が使えるんだ？別に興味があるとかじゃ無くて、戦力の把握の為に聞きたいのだが」

「うわあ、このクズニート下心がダダ漏れだわ」

「ばばば、そんなんじゃねえーから！」

カズマさんの発言にアクア先輩が軽蔑の目を向ける。

でも、そう言うやりとりは信頼関係があつてこそ出来ることなのだろう。

私なら、そのまま疎遠になるとかならないの程度をはかることが出来ないからだ。

いいなあ、仲のいい信者がいて。信者欲しいなあ。

「チラチラ」

「そつとしておこう」

「なんでよ！ナナシちゃん私の信者になってよ！」

「嫌に決まつてるでしょ、自分から淫乱だつて名乗つてるような物じゃないの！」

「今ならなんと性欲が強くなつてサボり癖が付きますよ！」

「デメリットしかないじゃないの！とんだ邪教だわ！」

「酷いよ、サキュバスとかオークには大人気なんだから」

「なお嫌だわ！」

「こんなにアピールするも、素気なく断られるのだった。

でも信者では無いけど、仲良く騒げる友達は出来たなと思うのだった。

「なんでこの子、嫌がられてるのにニヤニヤしてるのかしら？DMなの？」

「なんだかんだあつちもダメな女神で苦勞してるんだな」

「特典が女神だと自分は素のスペックだから足を引つ張るもんね」

「はあ？」

「はあ？」

あと、アクア先輩が乱闘の末にカエルに食べられてました。

「カズマさん！カズマさん！ぎやあああ、早く早く、ぎやあああ！」

「アクアー！いいぞ、そのまま食べられてるんだ！」

「良くないわよ！ちよつと、早く助けて！助け、あつ……」

「ふむ、捕食中は動きが止まるのか」

この後、滅茶苦茶ヌルヌルになった。

主にアクア先輩が。

冒険者にエロ魔法を

「火力が足りない」

翌日のことだった。

宿屋のグレードをあげるには稼ぎが少ない。

ならば、ギルドで朝まで過ごすというギルド難民と化していた私の近くでカズマさんが言った。

「どうやらカズマさんは、昨日の冒険から経験を活かして仲間を増やすことにしたらしい。」

ちなみにウチのナナシちゃんは逆に自分を鍛える道を選んだ。

他人に頼ろうとするカズマさん、自分を頼ろうとするナナシちゃん。

同じ冒険者でもスタイルが違う。

まあ仕方ない、冒険者は最弱職、人にスキルを教えて貰えなければただのデメリットの塊、ぼっちなナナシちゃんには向いてないのだ。

早くレベル上げて転職を進めます。

「急にどうしたんですか、カズマさん」

「おいえっちゃん。まさか、ここに泊まったのか？」

「暖かいですからね……」

占領していたテーブルから布団を剥ぎ、元に戻す。

テーブルとテーブルをつなげると、ベッドになるんだからテーブルすげえ。

「よく追い出されなかったな」

「ガチ泣きしてやれば、こっちのもんですよ」

「誇っちゃダメだろ」

あれは怖かった。

ルネさん激おこぶんぶん丸だったからね。

ストリップで小遣い稼ぎしてたくらいで怒られるとは思わなかったけどね。

別に誰かと寝てないし、ギルドで『自主規制』した訳じゃないから怒ることもないと思うんだよね。

「カズマさん、お腹は空きませんか？」

「なんだ、なんか食べ物でもあるのか？まあ空いたけど」

「ではちよつと待って下さいね」

取り敢えず朝ごはんを調達する為に酔っ払い達に近付く。

みんな酔い潰れて寝てしまっている。

お酒は最高だもんね、仕方ない。

「ダストさん、ダストさん、朝ですよ。よし寝起きですね」

「……なんで服を着てるんだ？」

「ブレインウオッシング。ダストさん、お腹空きました。ご飯下さい」

「財布はそこにあるから……後で返してくれ」

意識が朦朧としている状態だったので軽く魔法を掛けたら、あら不思議。

これで懐が暖かくなります。

これを何人かでやって、さあ朝ごはんです。

「なっ……そんな手がっ!」

途中、ガタツと立ち上がった姿勢のまま固まった紅魔族の子がいたが、君じゃこの手は使えなさそうである。

ホクホク顔で帰ってみれば、カズマは両手をあげて喜んだ。

「エロ系魔法って便利だな。洗脳とかエロの定番じゃ無いか」

「でも、魔法抵抗値によっては効かないよ」

「……催眠術みたいなことは出来ないのか」

例えば酒によって肉体が弱り、色気によって視野が狭くなり、眠気によって意識が薄

くなり、好意によって判断が甘くなり、そうやって心の隙間が出来た相手でないとか効かない魔法である。

まるで戦闘には役に立たない、健康者に対しては無意味な魔法である。

「他には何かがあるんだ？」

「液体に粘性を与える魔法や一時的に意識を反らす魔法、意識を固定する魔法や透明になる魔法」

「時間停止とかソープとか企画物なアレか」

「女神固有の魔法だからポイント的に無理かも」

言うなれば、ゴッドブローやゴッドレクイエムがそれに近い。

固有の魔法、それすら習得が出来るのは冒険者の強みだが運命という摂理をねじ曲げるにはそれ相応の代価が必要だ。

楽して覗きを働くことは出来ないのである。

相手の時間を止めたりも出来ないのである。

「そういえば、あの子はどうしたんだ」

「ナナシちゃんのこと？」

「一緒にいないってのは、何て言うか珍しいからな」

カズマさんは言うとおりに、ナナシちゃんとは昨日から一緒にいない。

そこに気付くとは天才かと思わず反応してあげなくなる。

私とファイリングが合うカズマさんと違ってナナシちゃんは対極的な人間。

つまりは、身持ちが固い真面目さんである。

そんな彼女がこんな世界ですることと言えば、ひたすらストイックに身体を鍛えることに決まっていた。

「彼女はレベリング中だよ」

「おいおい、ゲームでもしてるのか？」

「間違いじゃ無いよ。だって、この世界はまるでゲームのようだからね」

この世界は過酷で、しかしそれを覆い隠すように非現実的だ。

神すら干渉できないような魔王なんて化け物がある時点で過酷だと分かるのに、ゲームのような世界観がそれを当たり前のようにたらしめる。

神がチートを与えているのに、チーターが沢山いるのに、それでも勝てない魔王はゲームのラスボスのように倒せる相手か？私はそうは思わない。

少なくとも、チートを持った転生者よりも強い女神すら魔王をどうこう出来ないのに、それ以下の人間が出来るはずが無い。

出来るとしたら、キャラ性能では無くプレイヤースキルがすごい人だけだろう。

弱いままで弱いなりに戦う人こそが魔王を倒せるのだ。

「どうせ無駄なんだから、無理することはないのに、それでも頑張っちゃうんだよね」

「あー、何て言うかしんどいな。ってことは、モンスターと戦ってるのか?」

「私に良い考えがあるって行って出掛けたよね」

私は最初から期待しないし諦めている。

いつか誰かが勝手に解決して大団円、それを眺めて一件落着を待っている。

でも、そんなことを彼女は納得出来なかった。

出来ない彼女は彼女なりに戦う道を選んだ。

魔王と同じ土俵で、魔王と同じ世界観で、魔王と戦おうとした。

彼女は本気で魔王を倒そうと思っているのだ。

その結果、彼女はゲームのような世界をゲームのような方法で解決しようとした。

「そういえば、昨日からアクアがいないんだがそれと関係あるのか」

「大正解だよ。先輩ってああ見えて優秀だからね、効率を重視するナナシちゃんがほと

とく訳が無いんだよ」

「レベリング……アクア……一体何の関係が」

首を傾げるカズマさん。

まあ、そのすごさを理解するって言うのは難しいよね。

普通のプリーストと比べれば分かるけど、アクア先輩レベルの支援や回復はポンポン出せる物じゃない。

怪我をした、回復します、HPマックスなんてのはゲームの世界だけだ。

現実だと、怪我をした、回復します、気休めだわグフツでデッドエンド。

それほどまでに人格はあれでも女神はすごいのだ。

そんなスゴイ女神という特大のチートを無意識で選んだとしたら、もうそれは途轍もないことだ。

幸運なことに、価値を知らなくても最良の存在を引き当てたって訳だからね。

「ダメだ、降参だ」

「先輩は水の女神なんだよ。その水は、神が与えた聖なる水、つまりは聖水って訳だ。先輩が出した水は全て聖水になってしまおう。そして女神は救いを与える存在だからアンデッドを呼び寄せてしまおうんだ」

「今の流れだともしかして、墓地にでも行ってるんじゃないだろうな」

「ゲームばかりしてるだけあって、気付くのが早いねカズマさん」

そう、ナナシちゃんが行っているのはアンデッドに対して弱点特攻を行うことでのレベリング。

囿は女神アクア、攻撃手段は先輩の出した聖水、そしてあとは聖水を掛けるだけのお

仕事である。

ゲームで言うならやってくる敵をAボタン連打で攻撃して倒しまくるに近いかもしれない。

アンデッド討伐↓酒を買って奉納↓代わりに聖水を渡される↓それでアンデッド討伐↓以下ループ。

例えるなら無限アクア式レベルアップシステムとでも言っても過言じゃ無い。

「下世話な話、先輩の体液でも効果はあるから縛って放置でもレベル上げられるんだよね」

「なるほど、いいことを聞いた」

「その場合、経験値のマジックが減ってしまうのが難点だけどね。貢献度的に考えると囿の方が貢献しちゃうから、経験値配分が微妙になる」

「本当、ゲームみたいな世界だな」

二人してしみじみとそんな事を、一日中喋っているのだった。

結局、仲間になりたそうな人は来なかったよ。

大きいカエルにステラあああ！を

ギルドでグダグダすること二日目、遂にクラスチェンジしたナナシちゃんがやってきた。

白いローブに鉄の杖、一見ウイザードに見えるが同時に清廉さを感じさせる。

恐らく、それは露出の少ないせいでの世界の魔法使いっぽさが無いからだろう。

この世界の魔法使いはスカートとか穿くので魔法少女風だからね。

「プリーストになったわ」

「ジョブがダブるからウイザードは無いと思ったけど、プリーストなの？」

「攻撃魔法は使えないけど、えっちゃんを装備するから問題ない」

つまり、私に働けだど。

ウソダンドドコドーン！オデノカラダハボドボドダ！

「その全身から働かないって言う意思表示やめなさいよ」

「週休七日を希望します」

「それ、毎日が夏休みよ」

ナナシちゃんは深いため息を付いて、私をおんぶする。

なんてことだ、意地でも連れ出す気のようにある。

しかも、ステータスが上がったからか難なく持ち上げられてる。

逃げられない、コストしているので成長の見込みも無い、これからずっと拘束されること決定である。

「大丈夫、楽して強くなる方法を考えてきたから」

ぐでーとした私をおんぶしながらナナシちゃんがそんなことを言ってきた。

さて、そんなナナシちゃんと一緒にギルドに来たアクア先輩はカズマさんと何やらもめている。

何だ、いつものことかとスルーしよう。

「でも、プリースト? アクア先輩の下位互換だし、効率悪くない?」

「要は戦い方よ、問題ないわ」

「そーなのかー」

何故か自信のあるナナシちゃん、まあ考えがあるのだろう。

と思っただけど、普通にクラスチェンジ出来そうなジョブがプリーストだけだったらしい。

特に考えては無い模様。

「あー、二人とも集合」

呼ばれて私達がカズマさんの所に行くと、何やら一人増えていた。

大きい帽子に大きい杖、そして眼帯を押さえながら目がなんとらとブツブツ言っている。

この間の紅魔族の子だ。

「紹介するぞ、こい——」

「くつくつくつ、我が名はめぐみん！紅魔族のエリートにして、やがては」

「ていつ」

「いったあああああ！目がああああ、目がああああ！」

ゴロゴロ転がり回る自称エリートめぐみん。

彼女はカズマさんの発言を遮ったせいで、眼帯を引っ張られてダメージを負ったのだ。

「取りあえず、凄腕アークウイザードらしいめぐみんだ」

「私、知らない子？」

「えっちゃんとは固有魔法で引き続き働いて貰うので悪しからず」

「くそつたれえ……」

しばらくして、めぐみんとやらが回復してから冒険に出ることになった。

ジャイアントトードー、それはでっかいカエルである。

繁殖期の前になると農家や家畜を食べるモンスターで、捕食中の動きは鈍い。

特徴として物理攻撃が効きにくく、また金属を嫌うため、金属製の装備を着けていれば食べられない。

「事前に情報を調べておくと効率がいいわ」

「Wikiとか見てからゲームするタイプか」

「みんな、金属は持ったわね」

カエル対策を施したことを確認して満足そうにナナシちゃんは頷いた。

ちなみに、今回はめぐみんの性能を見る冒険でもある。

なので、二チームに分かれてジャイアントトードーを狩ることにした。

カズマさん達から離れた私達は色々な魔法を試すことにした。

あつちは凄腕のアークウィザードがいるのでサクサク行くだろうが、こっちは未知数な魔法なので時間が掛かりそうなのでために分けたのだ。

「取りあえず、えつちゃんの魔法から今回の作戦を考えたわ」

作戦内容は簡単だ。

カエルを見つけたら、チャームで魅了状態にする、金属のせいで捕食できない、カエルは右往左往する、そこを攻撃するだ。

「とにかく、モンスター寄せとチャームで集めまくって撃破するわ。広範囲に聞くように揮発性の毒もあるから安心して」

「えっ、それって私達もヤバいんじゃない……」

「大丈夫、プリーストだから問題ない」

ナナシちゃんのやりたいことが分かってきた。

私は逃げだそうとした、しかしナナシちゃんからは逃げられない。

知らなかったのか、ナナシちゃんからは逃げられない。

「や、やめろー！筋力ステータスが足りない、くそおー！」

「逃げることだけに全力になるのやめなさいよ、さあ来たわよー！」

ナナシちゃんはどこで買ったのか知らないが、魔物除けの香を焚いた。

この魔物除けの香、モンスターの好む香りを発生させるお香である。

使用方法は、引火させて投げるだけ、それでそっちに意識が向く。

ただし、強力すぎて持っているだけで臭いが移り、投げたところで自分からも臭いが数日間発生させられるためにモンスターがお香だけでなく自分の方にもよってくる。

「よく見つけたね、こんな地雷アイテム」

「それより援護頼むわよ、たああああ！」

臭いに釣られてやってくるカエル達、それに向かつていくナナシちゃん。

対策さえすれば初心者用のカエル、そんなの相手になるわけが無かった。

初撃、ナナシちゃんがロッドの先端で小さいながらも傷を付ける。

そして、援護の指示が飛ぶ。

「ポイズン、パラライズ、アーマーブレイク、カース、スリップ、コンフエ、パワーブレイク」

「見事にデバフ系ばっかね」

墮落とは、つまりはやるべきことを放棄すること。

楽な方に流されているようで、何もしないのだ。

それは要するに、生者の本分である生きることを放棄すると同義。

生命力の低下とは墮落に通じる物がある。

生きていく上で必要な元気を奪うデバフは、要するに墮落させることとしても考えられるのだ。

「白目向いたまま痙攣して寝ながら吐いてる……」

「腐つても神ですので、もう働いたし休んでもいいよね」

「何言ってるの、止めを刺さなきや」

そう言つて、ナナシちゃんは傷口に向かってロッドで攻撃を加える。

そして、目を瞑つて呪文を詠唱した。

「ヒール、ヒール、ヒール、ヒール」

「ゲ……グゲツ……ゲボオオオオ!?」

「ヒエツ!?!」

カエルを回復させて何がしたいのだろうか、そう思われるような方法を取ったナナシちゃんの新しいプリーストの戦い方は壮絶であった。

回復の重ね掛け、それは肉体に過剰な回復を与える。

時間の回復ではない回復というそれは、肉体の細胞分裂を加速させ、加速させ過ぎて悪影響を与えた。

体内に発生する腫瘍、所謂ガンの大量発生。

結果、ジャイアントトードーは内蔵を丸出しにした状態で嘔吐して固まった。

「気管に腫瘍が出来て呼吸困難になったのね」

「……………」

「カエルは胃袋ごと嘔吐するって本当なのね。次、行くわよ」

死体に一別して獲物を探すナナシちゃん。

怖い、あと怖い。取り敢えず怖いよ。

最早それは冒険ではなかった。それは作業だった。

「目標をセンターに入れてヒール。目標をセンターに入れてヒール」

「君はどここのチルドレンなんだよお……」

カエルを嘔吐させる簡単なお仕事です。

私達がそんな作業をしていると、暗雲が立ち込めた。

上空を覆う魔法陣、周囲を旋回する大量の魔力。

「ば、馬鹿な……」

「どうでもいい、それよりカエル探して」

「ブレない、ブレないよこの子」

真顔やめーい、こんなのに動じないとか大物かよ。

将来大物になるよ、絶対。

だが、これはネタ魔法である爆裂魔法の気配。

爆発させるだけではない、炸裂するだけではない。

爆発しながら炸裂もする、そんな魔法である。

「うおー」

「あっ」

動じないナナシちゃんと違って、表面積の大きい私は影響を受けていた。

荒れ狂う暴風が私の身体を捕らえ、ナナシちゃんから拐っていく。

「へいっつー!」

私は大の字で地面に落ちた。

あつ、地面からカエルとか予想外です。

助けてください、ナナシちゃんがいないと金属がないから食べられてしまいます。

あつ、やめっ……。

夕暮れの帰り道、私達のパーティーはカズマさんとナナシちゃんを残して全滅した。

二人以外ヌルヌルである。

「ヌルヌルですよ、ヌルヌル……」

「口の中って意外と温いんですね」

私をナナシちゃんが、めぐみんをカズマさんが背負っている。

なお、アクア先輩は泣きながら歩いている。

「ありがとう、ありがとうカズマさん……ぐすつ、うわああああん」

「泣くな泣くな、変な目で見られるだろ」

「心なしか、私の後ろにいるコイツが元気な件」

だつてヌルヌルですよ、ヌルヌル！

「でもネタ魔法でも高火力な魔法が手に入って良かったね」

「えっ？」

「えっ?」

「おいめぐみん、どういうことだ?」

めぐみんが視線を反らしながら口を開く。

「私は爆裂魔法が好きなんです。爆裂魔法も!ではなく爆裂魔法が!好きなんです。つまり爆裂魔法以外に興味はありません」

「ふーざけんなつ!戦闘不能になる高火力とかピーキー過ぎるだろ!アーラシユなのか!ステラつてしまうのか!ステラあああ!」

「今なら食費と雑費だけで、凄腕アークウィザードが無報酬で雇えますよ。お買い得です」

「いらねえーわ!」

「あー見捨てないでください!もう他のパーティーに行く宛もありません!ヌルヌルプレイでも何でもしますから!」

「や、やめろ!よし分かった、落ち着けめぐみん」

「カズマさんカズマさん、ヌルヌルプレイ、私もしたい」

「今、言うなよおおお!ややこしくなるだろ、えっちゃん!」

この女騎士にお祈りを

むすつとした顔でナナシちゃんが飲んでいた。

あれから数日、私達は別行動をしていた。

一緒にいない、たぶんこれが一番早いと思います。

そういうわけで、レベリングは単独である。

「どうしたの、ナナシちゃん。睡眠以外カエルを狩ってたのに珍しい」

「人を獣の血に飢えた狩人みたいに言うのはやめて。それにしても、アンタはアンタで適応してるわね」

「えー、そんなことないよぉ」

そう言われるが私は今までなにもしていない。

そう、何も！して！いない！

ただ、ギルドに入り浸って仲良くなった人と食事をしていただけだ。

冒険譚という自慢話を聞いたり、プレゼントを貰ったり、プレゼントをギルドに売ってお小遣いにしたくらいしかしてない。

「どうして働いてないのに、収入があるのよ……」

「エロけりや誰にでも股を開く訳じゃないよ。良い女つてのは抱かれずに貢がせるのよ」

「キャバ嬢としてもやっていけそうね」

まあ、男心は分かるからね。

権能的にヒモになる才能はあるのである。

「それよりどうしたの？んー？」

「カエルが全滅した。ここら一帯で見当たらなくなつたわ」

「何をしたんだよお……」

冬眠から目覚めたカエルがいたはずなんです、おかしい。

「モンスター寄せからの自爆特攻してたらいつの間にか……」

「揮発性の毒とか、もはやテロだよお」

「うるせえ！踊り子みたいなエロい格好して貢がせてる悪女が！このエロテロリストがあー！」

「いたたた、もげる！ポロリしちゃうからやめえ！」

どうしてナナシちゃんのことあるごとに掴み掛かってくるかなあ！

自分のを揉みなさいよ、まったくもう！まったくもうだよ、まったくもう！

そんな私達と対照的に、生活が苦しいのがカズマさん達だった。

「カズマさまああん！お願い、お願いよおお！」

「ぎっけんなあ、自分がツケで飲んでたんだろ！だいたい、金があるわけないだろ！」

「なんでよ、こないだのお金はどこ行ったの！使っちゃったの、馬鹿じゃ無いの！」

「馬鹿はお前だ、お前が全部使ったんだろが！その上、ツケで飲むってどういうことだ」

またやってるよ、と周囲に思われるようなやりとりを二人がしていた。

ギルドに入ってきて早々、アクア先輩が腰に抱きついて懇願するもスルーしていたが泣きつかれて動けないカズマさんがそこにいた。

まず、最初の時点でスルーしようとする当たりが中々クズい。

「よし分かった、俺に良い考えがある」

「なになに、へそくり？やだあ、それなら早く」

「お前の装備を売ろう。何、ギャルのパンティーが高値で売れることだってある。見た目だけなら、まあ」

「だ、ダメよ！この羽衣は私の唯一のアイデンティティーなのよ！やめて、取らないで」
「うるせえ、こちとら金があるんだよ」

「やめてえ！私の大事な物を奪わないで！そんな、無理矢理！力尽くなんて最低よ！」

「人聞きの悪いこと言うんじゃないやねえよ！事実だけど、誤解されんだろ！」

可愛そうなアクア先輩、いいぞもつとやれ。

しかし、現実是非情であった。

二人を見ていたら、アクア先輩と目が合ったのだ。

……し、知らないよお。

「ちよつと、アンタいいところにいるわね！金貸しなさいよ、もちろん無期限よ！」

「それはもはや貸してないよお」

「いいから来なさい！」

先輩の命令は絶対、逆らうと余計に酷くなるってアクシズ教徒に関わったことがあるから知ってた。

私は諦めて先輩の元に向かう。

「はぁ……」

便利な固有スキルである、浮遊スキルによってふよふよ漂うように浮きながらに移動して先輩の元に行く。

このスキル、無重力みたいな感じで歩かなくて良いから楽である。

「なにそれすげえ!？」

「エリス先輩が、私のエリス先輩がアクア先輩に奪われる」

「人聞きの悪いこと言わないでよ、事実だけど誤解されるでしょ」

さつきと同じように固有スキル、エクストラポケットというものを使う。すると、空間にチャックのような物が出てそこが異空間と繋がっている。

よくあるアイテムボックスという奴である。

持ち運びの労力を減らし、楽したいというまさに墮落の神らしいスキルである。

「お、王の財宝か」

「どつちかっていうとスティッキイ・フィンガーズ」

アリーヴェエデルチするエリス先輩は、強面の冒険者達の手にあくア先輩から渡された。

『人身売買されたみたいに言うのやめてくれる!?!』

おっと、なんか変な電波を受信した気がしたぞ。

借金を払って上げたが、そこはカズマさん。

流石に払うよと良心の呵責からか働くことを決意した。

カズマさん、ギルドで働くってよ。

「あーそ、じゃあいつてらー」

「お前も行くんだよ、あくア!」

「そうですよ、後輩からカツアゲはどうかと思います」

「めぐみん、この世は弱肉強食。自然の摂理って奴よ」

「なるほど、一理あります」

「納得すんなよ。調子乗るだろ」

ああ、相変わらずアクア先輩はフリーダムである。

そして、カンストしているステータスが憎い。

これ以上成長が見込めないのだ、そうエリス先輩の胸と同じようにね。

神様は最初から完成してるから成長しないのだ。

『が、頑張れば大きくなりますう！』

おっと、また謎の毒電波を受信したぞ。

「すまない。まだ、このパーティーの募集はしているのだろうか？」

私が虚空を見つめて、アへ顔を晒しているとカズマさんの方で声が聞こえた。

正気に戻って、其方を見れば金髪碧眼の女騎士がいた。

「はいはいくっころくっころ」

「くっ……何故だか呆れられた視線を感じる」

「大丈夫ですよ嬢さん、上級職の方は大歓迎です。ハッハッハッ」

「そ、そうか……なんだか思ったのと違う、いやだがまだ本性が出てないのかもしれないな

い」

女騎士さんはブツブツ言ってるが、なんだろう。

私の権能が囁いている、私の中の権能が囁くのよ。

コイツはやべえ、すげえ性癖の臭いがプンプンするってな。

「ねえ、えっちゃん。あの人、なんでモジモジしてるのかしら」

「それはね、ナナシちゃんと私がヤバい奴を見るような目で見ているからだよ」

「ねえ、なんでカエル話を聞いて興奮してるの？馬鹿なの、変態なの？」

「それはね、やっぱりヤバい奴だからだと思うよ」

私達を余所に、めぐみんが「おおクルセイダーとは壁役として素晴らしい」と褒め称

える。

アクア先輩も「これでパーティーの防御も完璧ね」と太鼓判を押している。

カズマさんも「よし、これだよ。こういうのを求めていたんだ」と喜んでいる。

あつ、これアカン奴だ。

「絶対、あの三人がいいねしてるのはヤバい」

「そうね、めぐみんの時にアクアさんが喜んでいたのでに通じる物があるわ」

「ちよつと説得してみる」

私はカズマさんの方を見ながら固有スキルを発動する。

スキル、オラクル。

視界に入ってる人間と脳内で会話が出来る、ただし瞬きできない。

『聞こえますか、聞こえますか……私は今、貴方の脳内に直接語りかけています』

『この声はえつちゃん、そんなニュータイプだったのか』

『フアミチキ下さい』

『これもスキルか、すげーな』

目と目が合う、瞬間好きだと気付いた。

じゃなくて、順応早っ！

頭の中で声が聞こえたカズマさんは私の方を見ながら何やら納得した様子を見せていた。

普通に対応できるのはすごいと思います。

『コイツ、直接脳内に……それでご用件は？』

『神は言っている、その女はやめなさいと』

あつ、ドライアイ。

目がシバシバするので、オラクルを中断。

返答は聞かなかつたけど、伝わったよね。

流石のカズマさんも一周冷静になって横の二人の様子を見て悟ったようだった。

「取りあえず、少し時間をくれないか。すぐに決めるのは良くないと思うんだ」

「何ですよ！アークプリーストに、アークウィザード、そしてクルセイダーのパーティーになれるのよ！」

「そうですカズマ、パーティーの防御力が上がればなんの憂いも無く我が爆裂魔法も撃てますよ！」

「やっぱリナシで、これからのご活躍お祈りしています」

「なんでよああああ!?!」

二人の熱い推しに、カズマさんは決意を固くしたようだった。

「はううん！」

「えっ?」

「……どうした?」

「いや、今、えっ?なんか今」

「言っていない」

カズマさんの質問に、キリツとした顔で否定する女騎士を見て気付いた。

コイツ、DMだ。

上級職に下克上を

カズマさんのパーティーに入りたいと、駄々を捏ねる女騎士さん。

名前をダクネスというらしい彼女は、断られれば断られるほど鼻息を荒くしてカズマさんに加人を要望する。

私はこれを、ドムループと名付けようと思う。ループって怖いよね。

そんな彼らの元に、短い銀髪の少女が近付いてきた。

スレンダーダーで露出の多い軽装、顔に傷のある冒険者の少女だ。

そして、よく見知った少女だ。

「アハハ、ダメだよダクネス。そんな強引に迫っちゃさ」

「あ、貴方は……」

「やあ、私はクリス。ダクネスの友人で見ての通り盗賊だよ。君、役に立つスキルが欲しいんだってね。盗賊スキルとかどうか？中々便利なスキルが多いんだ。今ならキンキンに冷えたシユワシユワ一本で手を打つよ」

「へえ、すいません！シユワシユワ一つ！」

注文されたシユワシユワを一気に飲み干し、彼女はプハッーと声を出した。

美味すぎる犯罪的な美味さだ、とても言いそうだ。

「ッ!？」

「どうしたんです、クリスさん」

「な、何でも無いよ」

私の舐め回すような視線に、彼女は背筋を震わせる。

綺麗な背中だ、白磁のようで触れれば柔らかそうだ。

弾力を僅かに孕んだ小さい胸に、芯に固さを伴った引き締まった腹筋、背中から腰に掛けるのラインは緩やかで綺麗な曲線の尻。

「……ハッ!？」

「どうしたのえっちゃん?」

「私のエロセンサーが言っている、あのスリーサイズを知っていると」

「……ふざけた名前のスキルね」

な、なにおう!

偽装系や変装から潜伏まで無効化する優秀なスキルだぞ!

私の邪な視線から、逃れるすべはあんまりないってスキルなんだぞ!

魂レベルで体型を特定するエロスキルなんだぞ!

「でも、それは知り合いということなの?」

「知り合いだけどいるはずのない存在なの」

「なるほど、ならばそれは有名人とか故人、あるいは……」

ナナシちゃんは口元を歪めて楽しそうに口にする。

「たとえば、女神とか？」

「すごいよナナシちゃん、シリアスっぽい！」

「アンタの発言でシリアルになったわ、雰囲気がち壊しだよ」

そこに気付くとは天才か、とでも言えば良かったのだろうか。

それはそれとして、あの周囲をキョロキョロ見回して何やら警戒している様子の先輩らしき人物に話しかけるべきか。

どうでもいいけど、どうしてアクア先輩は気付いてないんですかね。

「あつ」

「あつ」

「ヤッホー、せんば——」

「ちよ、ちよつとごめんね！この子借りるから！」

先輩が素早い動きで私を抱きかかえ拉致していく。

ステータスのおかげか、その動きに無駄は無い。

路地裏まで連れてかれた私は、壁を背に動きを封じられる。

怖い怖い、耐えられない。

横から逃げようとする、進行方向を遮るように両手を先輩が前に出して遮られる。

「か、壁ドンッ！」

「ななななななっ！」

「どしたの？」

顔を真っ赤にした先輩が、口をパクパクさせていた。

なにそれ可愛い、チューしよ。

「わわわわわわっ！」

「どしたの？」

「キ、キスッ！お、女の子同士ならノーカン！ノーカン！」

なぜか、テンパリながらノーカンを連呼する先輩。

どうした、チンチロでもやるの？

「つて、違ーう！何してるんですか！」

「ああ、いつもの先輩だ」

「なんでいるの！なんでキスしてくるの！馬鹿なの、死ぬの！うわああああん！」

「あうあうあう、やめてください死んでしまいます」

前後に揺らされて、頭がクラクラする。

まさか、こんな場所で殺されそうになるとは貧乳恐るべし。

「ど、どうして……アクア先輩すら誤魔化せたのに」

「先輩が魂レベルでエロいから」

「なんで私が悪いみたいに言うの！私が悪いの！うわあああん！」

先輩が泣きながら胸に顔を埋めて来た。

そして、泣きながら胸を叩いてくる。

あの、ちよつと、だんだん力が、痛っ！

「畜生、この胸が悪いのか！」

「いたたた、殴らないで、殴らないで先輩！」

もはや叩くレベルでなく、殴るレベルだった。

何がそうさせるのか、胸への憎悪が彼女が駆り立てるのか。

取りあえず、ヒールお願いします。

落ち着いた先輩は、自分が内緒で下界に降りていたことを教えてくれた。

あー分かる分かる、こういうのエロ同人を見た。

優等生がちよつと非行に走って脅されていやーんな感じになるやつだ。

そんな願望があったなんて……エツちな子！

「先輩ってエッチだなあ……」

「何で!?何がどうして、そうなった!」

「そんなことより、こんなところで時間を潰していいんですか?待たせてるんですよね」

「待つて!それも大事だけど、さっきのは撤回して!私がエッチな子だって言うの、撤回して!」

「大丈夫です、私は分かっていますから!」

「分かっているよ!やめてよ、そのドヤ顔!誤解だよ、誤解してるからね!」

大丈夫です、淫蕩と墮落の女神は全てを受け入れます。

女神がエロいとかラスボス臭が漂いそうで良いと思います。

ともあれ、待たせるのは悪いとのことで私達はギルドに戻った。

なお、先輩は何故か疲れた顔をしていた。

普段デスクワークなのに下界に降りてるから疲れてるんだろう、可愛そうに。

「大丈夫ですかあ、先輩」

「ああ、絶対分かってないよ。自分が原因だって分かかってないよお」

「私が……胸ですか?」

「それ以上言ったら、怒るよ!」

もう怒ってるよお……。

怖いので、刺激しないで置くことにした。

ギルドに戻ると、ダクネスと名乗る女騎士さんが床に転がっていた。

両手両足を縄で拘束されて、ビタンビタンと暴れ狂っている。

「ダクネスうううう！」

「おお、クリスカ」

「何で普通に対応してるの！」

「クリスカ、私の事は気にするな。カズマが私を無力な女だと教えてやると、身体を拘束してこれから現実をカズマなりのやり方で教える所だ。きつと、すんごいことに違いな
い」

「おい誤解を招く表現はやめろ！事実だけど、ドン引きしてんだろ！見るな、お前ら俺を見るなああああ！」

ギルドにいた女性陣から冷たい視線が注がれる。

唯一注いでないのは、ハアハアしながらしゅごいのおとか言ってる淫乱女騎士ダクネスと私くらいだ。

「……えつちちゃん？」

「お前がママになるんだよ！これからお前は公開『自主規制』されて、カズマさんの性奴

隷にされるのだ！ですよ、カズマさん！」

「悪化するようなことを言うのはやめろー！違うんです、なんだアンタら！だ、誰だ通報しやがったのは、離せ！俺はまだ何もしていない！あつ、違うんです！まだって言うのは言葉の綾で、やる予定とかないです！」

私の悪乗りで、カズマさんが連行されていく。

……やり過ぎちゃったぜ。まあ、無実だから大丈夫だろう。

だから無表情で私を見るのをやめて下さい、ナナシちゃん。

「後で保釈手続き」

「りよ、了解です」

ふえええ、ハイライトのない目が怖いよお。

夜、カズマさんは無事に解放された。

真実を見極める魔道具とやらを使って無実を証明し、そして違法捜査だの冤罪のどつち上げなどクレームを付けた上で、ろくに事情聴取もされなかつた事を理由に訴えるとまで言つて、慰謝料を貰つて帰つてきた。

しゅごい、タダでは転ばないハングリー精神を垣間見た気がする。

「ごめんね、カズマさん」

「くっ……ゆ、許さないからな」

「ええ、ダメえ？ほんの、出来心なんだけどお」

「……今回だけだからな」

抱きついてやれば、流石のカズマさんも怒るほどでは無いと許してくれた。

横でぼそつと、女性陣が最低だの、男って馬鹿だの言ってるが、私もそう思う。

さすがカズマさん、社会的に潰そうとした人間を許せるなんて中々出来る事じゃ無いよ。

なお、煽りでは無く本心である。

「結局、スキルを教えて貰おうとして口論になって冒険者は弱いと言われた事にカチンと来たからああなったと、まったくもう人騒がせだよ」

「クリス、少し黙れ」

「なんで!？」

「良いところで、くっ!」

悔しそうなダクネス。

まあ、何があつたかというのは大体エリス先輩が言っているとおりの事だった。

冒険者を舐めるなよ、ようはスキルの使いようだ、上級職だからって強いわけじゃ無い、俺が勝つたらパーティーに入れないって感じのやりとりだったらしい。

カズマさんが思いついた上級職の倒し方で無力化するという意味が、あの誤解を招くような言葉には込められてたのだ。

「カズマ、勝負はまだ付いていないぞ！ さあ、いまずぐ続きを」

「もういいよ、俺の負けで良いから、帰れ帰れ」

「くううう、関わりたくないからと負けを認めてまで追い出そうとするとは、やるな！

じゃあ、パーティーに入れて貰えるとのこと、また来るぞ！」

「もういやだああああ！ ナシ、今のナシで！」

ててーん、カズマさんのストレスがマツハになった。

キャベツ達に収穫を

ダクネスが仲間に加わるまで紆余曲折あったため、今日はこの間出来なかったスキルを教わることになったらしい。

まあ、カズマさんがまたやらかした訳だが……。

「ひやふううううう！ 当たりも当たり、大当たりだああああ！」

「い、いやああああ！ パンツ返してええええええ！」

朝、騒ぎを聞きつけて視線を向けてみれば、何故かパンツを振り回しているカズマさんがいた。

もう、この時点でああ先輩が盗賊スキルでも教えたんだろうと把握する。

しかし、幸運の女神より幸運があるとかカズマさんってばすげえ。

あと、幸運の女神なのに不幸とかエリス先輩不憫で可愛い。

「引くわ、マジ引くわー」

「ふははは、返して欲しければ金を払うんだな！ さもなければ、これはこの場で売り払う！」

「分かったから、パンツ返してええええええええ！」

周りに冷たい視線を向けられながらも、もう慣れたのかカズマさんは先輩から平然とパンツを人質に金を奪り取った。

私達が出来ないことを平然とやってのける、そこに痺れる憧れる。

「なんですか、ステータスが上がって冒険者から変質者にジョブチェンジしたんですか」
「おいめぐみん、これは確率なんだから誤解だぞ」

「狙ったとしか思えないのですが……」

「おい、公衆の面前でそんな鬼畜なことやるなら私にしろー！」

「しねーよ」

わーわー、騒ぐカズマさんのパーティー。

相変わらず楽しそうである。

そんな風に見える私を見て、レベル上げ中毒の廃人ナナシちゃんが無表情でやってきた。

「なんだか最近無表情がデフォになってきてる彼女なんだが、休息が必要なんじゃ無いか。」

「そろそろアレの季節だ。行くぞ」

「えっ、アレってなに？」

『緊急事態、緊急事態。冒険者の皆さんは正門に集まって下さい』

なんの話か分からなかったが季節とギルドの招集に私はピンときた。キャベツだ、この世界のキャベツの収穫に違いない。

冒険者達が混乱している中、彼女は無駄に洗練された無駄の無い動きで私を拉致する。

もう一秒でも惜しいというのが態度で現れていた。

正門に辿り着くと、地平線の彼方から緑色の波がやってきていた。

ヤバい数の暴力とか勝てる気がしない。

雑魚でも囲まれたら死ぬと思うので、タゲ取りして一体ずつ確保すべきそうするべき。

「あの、ナナシちゃん。どうして、正門から離れていくのかしら?」

「狩り場に集中されると困るから、別の場所で戦う」

「どうして、それに私も付き合うのかしら?」

「アンタの魅了スキルでタゲ取りしたら効率いいから」

いやあああああああ! もう一回、いやあああああああ!

だから言ってるじゃん、囲まれたらお終いなんだよ。

紙装甲の私が囲まれたら、直ぐ死んじゃうよ。

「はいこれ」

「これは？」

「麻痺の魔法が入ったスクロール、魔力を込めれば大丈夫な、なるほど。」

でも、たぶん普通のスクロールじゃ無いよね。

「欠陥品では？」

「それを捨てるなんてとんでもない」

拒否権は無かった。

何故なら、既にキャベツは近付いてきていたからだ。

前門のキャベツ、後門の効率厨。

恐ろしいのは後者である。

「野郎、ブッコロツシヤアアアア」

もう自棄であつた。

逃げ場が無い私は、仕方ないので魅了のスキルを発動した。すると、キャベツ達が進路を変えて私の方に向かつてくる。

その光景は、鎌首を上げた蛇のようですらあつた。

「スクロール発動！あつ、あばばばばばば！」

「言つてなかつたが、広範囲なせいで発動者も麻痺する」

畜生、やっぱり欠陥品だった。

全身に電流が走つたような激痛に痺れながら私は思った。

そんな私の周囲にはキャベツが落ちている。

どうでもいいけど、どうやってキャベツが飛んでるのか不思議である。

「ブレイクスキル！さあ、あつちでやって」

「えっちゃん、私冒険者やめたい」

「はあ？」

「……やらせていただきます」

ワントーン下がった返事に私は怯えながら従うことにした。

何が彼女を変えてしまったのか。

人生の為のレベル上げが、レベル上げの為の人生になつてる件。

金とか名誉とかそんなもんじゃやない、貪欲に強さだけを求めてやがる。

あんなの人間じゃ無いよ、廃人だよお。

「バリアー！バリアー！バリアー！」

「おかしい、リリースストの結果が攻撃に使われてる」

ナナシちゃんが痺れたキャベツ達を回収せず、魔法を使って止めを刺していく。

モンスターが入ってこれないようにする結界の魔法を使ってた。

普通、薄い半透明の壁としか使えない結界を、彼女はぶつける事で攻撃に使っていた。対象に、結界を投げつけて分断するという使い方だ。

「違う、そうじゃない。なんで刃物みたいに使ってるの……」

「キャベツは柔らかいから強度が足りる。他のモンスターじゃこうはいかない」

「そういうことを言ってるんじゃないよ」

やめろ、結界を投げるんじゃない！

なんだそれ、気円斬なのか！斬新な使い方ですね、おい！

「あと、どうして回収しないの。お金になるのに」

「えっちゃん本気で言ってるの？金じゃレベルは買えないんだよ！」

「すいません、なんかすいません！」

私がタゲを取り、全体麻痺攻撃で動きを封じる。

ナナシちゃんが結界を作り出し、投げることで進行方向のキャベツを真っ二つにする。

そして、ブレイクスペルで解除して、再び私をタゲ取り要因として使う。

あと何回だろうか、心が折れそうだ。

「スクロール……ない、終わった！やった、やってやったぞ！」

「はい、追加で」

「ウソダドンドコドーン！」

デデドン、なんて効果音が聞こえてきそうな絶望だった。

このあと滅茶苦茶キャベツを狩った。

私達がキャベツと戦っていた頃、普通に収穫していたカズマさんのパーティーはちよつとした小金持ちになっていた。

「なんでよおー！私のキャベツが、なんでこんな額なの！」

「それがレタスが混じってまして」

「なんでよおー！」

若干一名、不幸な目に遭ってるがいつものことである。

あれ、何回も麻痺した私の方が不幸なんじゃ無いだろうか。

電撃プレイとかちよつとMじゃないんでツライです。

耐性スキル超えてくるとかどんだけだよ、どれだけ強力な麻痺の魔法を入れてるんだよ、上級の魔法を入れるなんて作った奴は馬鹿である。

「あー、キャベツが美味しい」

「マズい、もう一杯！」

「なんでナナシちゃんは青汁なんて飲んでるの?」

「乾燥させたキャベツの粉末の方が普通よりも多く摂取できるから、経験値効率がいい」
「それ、キャベツから作られてたの!?!」

あと食べたら経験値が入るから高いんですね、知らなかった。

ちなみに、ナナシちゃんは新しいスキルが手に入ってホクホクであった。

なお財布はホクホクでは無い模様、悲しい。

「もつと攻撃的な神様とかいないかしら、宗派変えたい」

「やめなよナナシちゃん、邪神でも崇めるつもり?」

「アンタのせいかわからないけど、ジョブチェンジ先にダークプリーストって出てドン引きされたわ」

「待って、邪神じゃ無いよ!」

確かに、生理的に受け付けないサクキュバスのような悪魔や生理的にヤバイオークに信仰されてるけどさ。

嘘、私の信者モンスターいすぎい!?!

ひ、否定できる要素が無い。私ってば、邪神だったの?」

「邪神、人類悪、快樂天ビースト、うっ、頭が……」

「こんな神様を祀ってもなあ、今のところエリス様でいいか。アクア様なら、アンデッド

寄ってくるけど、もう経験値低い雑魚しか来ないから別にいいかな」

「ちよっと働きすぎだから私の信者になって休んだらいいと思うの、魅力値的なのも上がるよ、色気が自然と出てくるよ」

「……人間って倒せば経験値得られるかな」

「やっぱ私の信者にならないでいいです、闇討ちしそうだから」

デュラハンにゲーム脳を

その強烈な一撃が、頭上を掠める。

「……………」

彼女はそれを慣れたように回避して、頭上に向けてスクロールを投げた。

落ちてくるスクロール、物を大量に収納できるが発動までに一日掛かる欠陥品。

それを彼女は目の前にいる敵の近くで投げたのだ。

「グオオオオオ！」

「55、56、57、58」

吠えるモンスターに彼女は意識を誘導する、モンスター寄せの魔法を放つ。

青い炎が地面に放たれると、理性では罫であると狡猾なモンスターは気付きながらも

本能に従って一瞬目を奪われた。

だが、それが間違いだ。

「ジャスト、一分」

遠く離れた彼女を覆い隠すように大きな影が重なる。

それは空から降ってくる巨大な岩石によって生じた物だ。

安全な位置取りをした彼女は無事だが、敵であるモンスターは被害を受ける。それほどの大きさだ。

「グオオオオオ！」

怨嗟を孕んだ叫びを上げて、そのモンスターである一撃熊は殺意を持って襲いに掛かる。

だが、もう遅すぎたのだ。

衝撃に足を滑らせ、背後から迫る超重量に押しつぶされ、ブチブチと足から潰れて最後には赤いシミとなったのだ。

「無駄が多すぎる、この案はダメかもしれないわね」

「びえええええええん！」

「何を騒いでるのよ、えっちゃん」

何でも無いような感じで一撃熊を処理したナナシちゃんが、木に吊されてモンスター達に襲われてる私を見てため息をつく。

そんな私の周りには人型の巨大なキノコがモキュツという効果音を出しながらパンチを集団で繰り出していた。

キノコに周囲をぐるっと囲まれ、そして攻撃力は無いけど毒攻撃を繰り出すキノコ達。

ふはは、貴様は胞子の苗床となるのだとでもいいそうに、顔のように見えるキノコの皺が恐ろしい。

「最近は少ないわね、インフェルノ」

「ぎやああああああ!?!」

そんな私をナナシちゃんは仕方ないと言いながら、スクロールを取り出して私ごと焼き滅ぼす。

やめて、それ上級魔法にしては威力高くて耐性スキルを超えてくるんだけど！
ちよつと、本当に熱いんだけど。

「うううううう」

ギャグかな、とでも言いたげな感じでプスプスと身体から煙が出る。

クソツタレエ、炎耐性はあっても防御力皆無なんだぞお……。

「キノコに囲まれてエロいな、喜べよ」

「うわああああああん！」

女子にセクハラされる日があるとは、このあと滅茶苦茶泣いた。

上手に焼けました状態で帰った私はしばしの休憩を与えられた。

そんな私の元にカズマさんがやってくる。

「おいえっちゃん、アレはなんだ？」

カズマさんの指さす先にはいつものナナシちゃんの姿があった。

「幹部死ね幹部死ね幹部死ね幹部死ね」

掲示板を見ながら、机にナイフを抜いたり刺したり、目は血走り殺意の波動に目覚めそうである。

ああ、フラストレーションが溜まっている。

「おい、俺がめぐみんと爆裂魔法を撃っては寝ている日々の中に何があった」

「モンスターが刈り尽くされてる状況で、魔王軍の幹部のせいでリポップしないって言うってた」

「おい、やっぱり転生のせいでゲーム脳になってないか？頭、パツパラパーになってないか？」

世界が悪い、私は悪くねえ！

ゲームみたいな世界のせいでゲームみたいな感覚になってしまうのも仕方ない。

「カズマが、カズマがうわあああああん」

「ところで、あそこで先輩はどうして泣いてるんですか？」

「よく見ろ、アレは嘘泣きだ。チラチラ見てるだろ、殴りてえ……」

どうせ本音でもぶちまけたのだろう。

大概の女性はカズマさんの本音でフルボッコだからである。

私達が雑談していたら、受付のルナさんがプルプルしながら掲示板の前に立った。

どうした、トイレでも我慢しているのか？

「緊急、緊急……冒険者の皆さんは直ちに武装し、戦闘態勢で街の正門に集まってくださいー！」

「なんだ、また野菜か？」

「取りあえず、行ってみましょう」

移動した先にいたのはキャベツでは無かった。

黒い鎧を身に纏い、首の無い馬に乗った首なし騎士。

生者に死の宣告を行い、剣技と不死性から近接戦闘までこなす。

アンデット特有のリミッターを外した状態での無茶な身体の使い方により、生前を凌

駕するパワーのあるモンスターだ。

ああ、アレはダメだ。

私の理性でもカバー出来ないレベルの害悪だ。

神としての本能が、アレを滅ぼせと訴えかけてきている。

そうか、許容できないと言うことは私もまだ女神として存在しているようだ。

少なくとも、受け入れられる邪神としては存在しないと再確認できた。

「俺はつい先日、この近くの城に越してきた魔王軍の幹部の者だが……」

怒りに震えているのか、デュラハンがプルプルしていた。

それに対し、正門からダツシユで移動する者がいた。

私の担当した転生者、迷える魂ちゃんことナナシちゃんだ。

「ままま毎日——」

「……んには死ね！」

「——うおっ!? まだ人が喋ってる最中でしょうがあ!」

振りかぶった剣を不意打ちに使うが、そこは腐つても騎士、技量によつて受け止め且つ剣を切るという武器破壊まで行う。

斬りかかったナナシちゃんは、即座に武器から手を離し距離を取る。

「動きからして剣術スキル……生前のスキルを引き継いでるのか」

「見ただけで分かるとか人間やめてるな」

「キチイ……何なんだよ人が下手に出れば毎日爆裂魔法撃ってくるし、いきなり斬りかかってくるし!」

地団駄を踏むデュラハンにめぐみんがふふんとドヤ顔で前に出て言った。

まんまと騙されて出てきたなど。

まさか、爆裂魔法は囿でおびき出すための作戦だったとは……やはり天才か。

「どうせ雑魚しかいない町だと放置しておれば、調子に乗って毎日毎日ポンポンポン撃ち込みにきおって……！頭おかしいんじゃないのか、貴様ら！」

「うるせえ！お前幹部だろ、魔王軍の幹部なんだろう！なあ、経験値寄越せよ！経験値寄越せえええ！」

「えっ？」

再び特攻するナナシちゃん、かつこいいぞナナシちゃん。

それはそれとしてアンドッドは死ぬ、おっぱいがないアンドッドと悪魔は滅んでどうぞ。

「おい、えっちゃん流石にヤバくないか？止めないと」

「何で？ゴミは駆除しないとイケないんだよ。あんな喋るゴミクズ気持ち悪いでしょ、アンドッドは人間じゃ無いから人権なんてないんだよ？」

「こつちもヤバい!？」

何を言っているのかと首を傾げる。

アクア先輩を見てみれば、その通りだと関心する様子が見られる。

アクア先輩が私を肯定している、ならばこれは間違いない、正論である。

「うおおおおお!?!おかしい、初心者 of 攻撃力じゃねえ!？」

「筋力強化、速度強化、防御力強化、魔法抵抗強化、ターンアンデッド」

「コイツ、息切れしないで！馬鹿な、王都の奴よりも手強いだど!？」

この世界は、人に対して有利に出来ている。

例えばそれは、レベルさえあれば素人がスキルの補正で達人の動きになれるのだ。

「ポイズン、パラライズ、アーマーブレイク、カース、スリープ、コンフェ、パワーブレイク、ターンアンデッド

！」

「筋力強化、速度強化、防御力強化、魔法抵抗強化、ターンアンデッド！」

「面倒くせえ！コイツら二人だけ、なんでこんな殺意に溢れてるの！俺が何かしたのか!？」

「うるせえ、経験値は死ぬ！」

「うるせえ、アンデッドは死ぬ！」

「もう死んでるよ！」

ナナシちゃんの剣舞が冴え渡る。

この流れに、良いぞと周りの冒険者も駆け出す。

だが、ただ一人静観を決めていたカズマさんが気付いた。

「待て、様子がおかしい！」

「もう遅いわ!」

デュラハンが自分の首を真上に投げる。

すると、今までの剣技が嘘のように向上した。

まるで見えているかのように、周囲にいた冒険者達を一瞬のうちに殺したのだ。

「フハハハ、甘く見たな冒険——」

「経験値、置いてけええええええ!」

「ええええええ!?なんで、なんで生きてんの!?」

腹が半分切れた状態で、ナナシちゃんが飛び掛かっていた。

その傷は、既に治りかけている。

ヒールと回復アイテムの重ね技による再生だ。

「だ、だがこの鎧は魔王様から頂いた、痛っ!無駄だっって言ってるだろ、やめ、やめろ—

!話を聞け!」

「うるせえ、痛いって事はーダメは入ってるんだろ!ダメ入ってるんだから、倒せるだろうが!—そんなぐらい分かれよカス!」

「どういう神経してるんだこの女、本当にプリーストなのか!?!戦い続ける為にプリーストって、どう考えてもパーサーカーだろ!—ええい、『お前は一週間後に死ぬ!』俺は今貴様に、だから攻撃をやめろ!」

本来なら、こうは行かなかっただろう。

女神によるデバフと、自身によるバフによってギリ耐えたのだ。

耐えたなら、彼女は回復職。元の状態に戻るのは容易い。

だが、そんな彼女と戦うのは嫌だったのか卑劣にも死の宣告を奴は撃ってきた。
なんて、卑劣なスキルなんだ。

「ナナシちゃああああん！」

「なんて羨ましい、私がいながら」

「おいお前達、仲間なんだろう！コイツを止めろ、ねえなんで心が折れないの！死ぬんだよ、死ぬことが確定してんだよ！」

「大丈夫だ、一週間は死なないからな」

「そういうこと言ってるんじゃないやねえんだよおおおお！頭がおかしいぞ、このプリーストオオオオオ！」

デュラハンが泣きながら再び応戦し始めた。

なんだか撤退したいのか、隙を見ては馬の方を見ているがダメである。

知らなかったのか、女神からは逃げられない。

私達の戦いが始まった。

「畜生、力も出ないのに相手が強化されてるとかふざけんよ。俺が何したってんだよ」

「お前中ボスだろ、中ボスなんだから雑魚じゃねえよな、よし死ね！今すぐ死ね！経験値
寄越せ！」

「経験値経験値うるせええええええええええ！せめて敵として見ろ！」

アンデッドに真理を

ダクネスという女がいる。

騎士の中の騎士、そう称される固い女だ。

クルセイダーという上級職の癖に攻撃系のスキルを一切抜いて防御のみに特化した存在。

それは民を守る騎士としての理念か、あるいはそれ以外の為かは本人以外知らない。だが、一つ言えることは極振りによる防御力は計り知れないということだ。

めぐみんという女がいる。

その破壊力は最強、並外れた魔力と精緻な魔力制御が無ければ扱うことすらままならない。

多くの才能ある魔法使いが、その魔法を習得することすら憚る恐るべき魔法。紅魔族ですら手を出さないそんな魔法を習得し、さらにそれを際限なく鍛え上げていく。

まさに最強の一撃、その魔法に並ぶ攻撃力の魔法は存在しないだろう。

一つ言えることは、極振りによる魔法攻撃力は計り知れないということだ。

アクアという女神がいる。

そのステータスは知性と幸運以外、高レベル。

治癒魔法のみならず、素手や杖を用いた近接格闘も得意としている。

致死の一撃すら片手間で治し、人の手に余る呪いすら余裕で解呪する。

死者すら蘇らせ、いるだけで水を浄化し、そのステータスはカンストしている。

一つ言えることは、ステータスがカンストしている存在は侮れないということだ。

では、一つ問いかけよう。

もし、全てのスキルを攻撃系で固めている攻撃のみに特化した存在がいたら。

もし、全てのポイントを攻撃力を上げるために際限なく鍛え上げていたら。

もし、ステータスを攻撃的に上げていたら。

それは魔王軍への恐ろしい脅威へとなるのではないだろうか。

えっ、女神エロース？

そんな卑猥な名前、知らない名前ですねぇ……。

ベルディアというモンスターがいる。

不死の肉体による無限の時間によって研鑽し、生前のスキルを所有し、リミッターを解除されたことによる強力な身体能力。

状態異常はほぼ無効化し、弱点となる光属性は魔王の加護により人間の物程度なら無効にする。

無限に死者の兵団を生み出し、ステータスに関係なく人間が解呪できない死の呪いを与える。

痛みに恐怖を覚え、死を克服し、その高レベルは弱点の水や火すら並のアンデッドのように効かない。

まさに最強の一角、魔王軍の幹部として申し分のない存在。

その、はずだった……。

「ぐおおおおお！なんなんだ畜生！ちよつと、文句を言いに来ただけで、ふざけんなよ！」

「ダクネス、やれ！」

「任せろ、ああん！こ、この程度か！この程度じゃ満足出来ないぞお！」

「クソがああああああ！」

攻撃を躲す技術を持っている。

急所を狙う技術を持っている。

無限の研鑽は、いかに効率よく破壊するという技術を突き詰めている。

だが、こんな経験は初めてだった。

「何なんだよおおお！攻撃しないで、全部受けるのに喰らってないとかああああ！」
「ああん、もつともつとだ！さあ、早くしないか！満足させろ、私を満足させ、ひやあん！」

「変な声出すなよおおお、気が散るだろうがああああ！」

ベルディアの攻撃が、悉く防がれる。

自分から当たりに来るといふ予想外の行動のせいだ。

悲しいことに、ベルディアは今まで常識的な存在としか戦っていないかった。

そう、まさに未知の戦い。アンデッド故に得た戦闘経験の活かせない相手だ。

「よし、やれアクア」

「ターンアンデッド、ターンアンデッド、花鳥風月、ターンアンデッド！」

「くっ、クソ、なんで効く！気が散るから、狙ってくるんじゃないやねえ！」

魔王の加護すら超える威力の聖なる力、自らのレベルすら超えてくるほどの水の魔法。

召喚した死者の兵団は何故か言うことを聞かず、他の冒険者によって討伐されていく。

致死の一撃を狙えそうな時ばかり、邪魔が入る。

まるで運良く死の運命から遠ざかるように、言いタイミングで指示が出る。

これでは敵を減らすこともままならない。

「この時を待っていた、行け！」

「経験値寄越せええええ！」

「ぐああああああ！クソが、オラア！」

「ガハッ！フッフ、フハハハ！どうしたデウラハン！まだ腕が千切れただけで、ハリー！ハリー！」

「あり得ねえ、鎧に罅とかどんな攻撃力してるんだ。なのに掠っただけで死にかけてるって、まるで意味が分からんぞ」

ベルディアは知らない。

死者のように死を恐れず、まるで死んでも次があると思ってるかのような存在を知らない。

まさか、攻撃力だけを鍛え上げた存在だと思ひもしない。

だから、これだけの高レベルなのになんで死にかけるほどに弱いのか理解できない。紙装甲だという事実気付くことが出来ない。

「えっちゃん、君に決めた」

「ポイズン、パラライズ、アーマーブレイク、カース、スリープ、コンフェ、パワーブレイク、スロウ、フリーズ、レサジー、ファイア、ミュート、コラプション、バーサク」

透明化の掛けられた、よく見なければ分からない縄がベルディアを拘束する。

それもエロ魔法が掛けられた特製の縄だ。

「ねえ、カズマさん。何に使おうと思つてたのかしら？」

「そりやもちろん暗闇とかで特定されないうちに……おいアクア、今は戦闘中だ後にしろ！」

「まだ終わつてないんですけど！私に何するつもりだったの！」

「安心しろ、お前だけはない」

「なんでよおおお！」

泣き叫ぶアクアに正気を取り戻したベルディアは困惑した。

困惑して、気付けば視界が変わつていた。

「はあ？」

いつの間にか、自分の身体が見えていた。

先程まで見えていた青い髪の女が消えた。

「何が起きているか分からないようだな」

「ふえ？」

「お前は一時的に意識を飛ばされていたんだ。聖水で弱つていなければ使えなかつただろ？」

それは、時間停止企画物によく使われる魔法であった。なんと、ベルディアは気付かぬ間に頭部を奪われていたのだ。

それだけじゃ無く、鎧すら剥がされてミイラのような身体が晒されている。何をされても時間停止されたら抵抗できないのである。

そう意識を固定する魔法によって、あたかも時間停止したかのように錯覚していたから仕方ない。

「だが」

「無駄だ。寝ながらも物を取ることが出来る念力スキルでお前の身体は拘束している」

「くっ、どうなってやがる！」

ベルディアは危機感を抱いていた。

このままでは、あのアークプリーストに浄化されてしまうと思ったからだ。

だが、その様子はない。

「何故だ、何故浄化しない？そうか、死の宣告を取り消して欲しく交渉しようとしているのか。だが、無駄だアレは——」

「まさか、俺が見逃すとも思ったのか？おいおい、そんな俺を見逃せば後悔するだろうみたいな事を言う奴を俺が見逃すわけ無いだろ」

「あれえ？」

答えはたった一つだ。

たった一つのシンプルな物だった。

「お前はこれから自分の身体が攻撃されるのを見るんだよ！なあ、今どんな気持ちだ！最弱職だからって舐めやがって、こちとら普段から苦労してんだから絡んでくるんじゃないやねえよ！ふざけんな、魔王軍の幹部だからって調子のんなよなあ！」

「どつちが悪役か分かりませんね」

「自分が有利だからって調子に乗ってるのはカズマさんだと思うの」

「騎士として流石に同情を禁じ得ない」

うるせえ！と仲間達に罵声を放つ男がいた。

そんな男の前に、ベルディアは自分の死を見た。

「お前が、お前が俺の死か……」

無数の剣が突き刺さった戦場に其奴はいた。

自らが武器破壊したそれらを見向きもせず、ただ進む其奴。

ようやく気付く、何故あれほどの攻撃力を持っていたのか。

それは恐らく仲間を信頼し、自らのステータスを攻撃系だけに絞っていたのだろう。

どれほどの信頼があれば、命を投げ捨てるような、防御力を捨てるという覚悟を出来るのだろうか。

ならば、と疑問が湧く。

「何故、職業の中で一番の攻撃力を誇るソードマスターではなくプリーストなのだ！」

「何時から私がプリーストだと錯覚していた」

「なん……だと……」

今までプリーストのような戦い方はしていなかった。

だがヒールや支援はプリーストの十八番。

ならば、パラディンかと言われれば剣技のスキルは用いていなかった。

そこで一つの可能性にベルディアは辿り着く。

「まさか！聖職者系の上級職なのか！」

「ソードマスターなど剣が無ければただの人、装備依存の職業など使い勝手の悪いだけだ。真に信じられるのは自分自身、つまり素の攻撃力である」

例えば、レベルカンストしているキャラがいるとする。

そして、雑魚モンスターが存在するとする。

そんなモンスターに、こっちの剣を使うか鎧はどうしようとか装備を考える人はいない。

そんなモンスターに、この技を使おうかどのくらいMPを消費して魔法を使おうかと悩む人はいない。

恐らく、無表情で技コマンドの上のこうげきコマンドを連打することだろう。

つまり、レベルカンスト前提で考えれば装備もMPも不要である。

「弱い今は考える必要があるかもしれない。だが、スキルは使い続けることでレベルが上がる。ジョブチェンジでスキルレベルがリセットされるなら、最初から目指す職業に就いた方が効率的だ」

この世界でモンスターを倒せば、魂の記憶を取り込みレベルを上げる事が出来る。

しかし、それで強化されるのは自身の魂、つまりステータスだけである。

それとは別に、使えば使うほど上がるスキルレベルというのがある。

だが、それは職業を変えたりリセットされてしまう。

もし同じステータスなら、スキルレベルの高い方が強いのだ。

ならば、カンスト前提で考えるなら早い内から職業を絞った方が良い。

「装備が必要な職業は装備が無ければただの人だ、魔法使いは魔法がなくなればただの人だ、聖職者はアンデッドしか戦えない。聖職者でなければ、特殊な方法以外で死者を殺せない。なら全てのモンスターと戦える職業は何か」

武器や魔法とは所詮、人の使う道具だ。

恐ろしい兵器も、最終的には人が使うのだ。

世界を滅ぼす核のボタンが目の前にあり、それをどちらが使用するか二人の人間がいて言葉による交渉が出来なかったとしよう。

最終的に人は暴力に、己の力でその使用权を争う事だろう。

その時、勝敗を分けるのに使う武器はなんだ。

それは、当人の肉体に他ならない。

「拳なら、装備する必要は無い。魔法を使わなければ、MPは必要ない。聖職者なら、不死者を浄化できる。なら、選ぶ職業は一つだけだ」

「拳……聖職者……そうか、貴様モンクか！」

「そう、力こそパワー！モンクこそ最強の職業である」

そう彼女は人類が初めて使った武器を、最後に使うであろう武器を選んだ。

その肉体による素の攻撃力を選んだ。

それすら効かない不死者すら、殺せるように聖なる力を宿した。

後は、経験値を捧げてレベルを上げるのみである。

「レベルを上げて物理で殴ればいいじゃない！オラア！」

「ただの脳筋じゃねえか！あばばばばばばば」

「経験値になったモンスターだけが、いいモンスターだ！」

その日、魔王軍幹部ベルディアは拳によって浄化された。

「よし、鎧は売って今日は飲み会だな」

「やったー！今日は飲むわよー！」

「アクア、お前は吐くから飲むなよ」

「なんでよおおおお！」

湖に浄化を

「多少キツくてでも、クエストを受けましょう！お金が欲しいの！お願いよおおお！もうバイトは嫌なおおお！コロツケが売れ残ると店長が怒るのおおお！頑張るから！私、全力で頑張るからあああ！」

今日も何時ものようにアクア先輩が騒いでいた。

可愛そうに、毎回お酒にお金を使ってしまう先輩はいつだって金欠なのだ。

「お金が無いなら、奢って貰えばいいじゃない」

「うわあああああああ！」

「やめろアクア、それ以上やれば死んでしまう」

アクア先輩が私を揺さぶる、やめてください死んでしまいます。

……ハッ、いつの間にか天界に帰っている所だったぜ。

妙に慌てた様子のエリス先輩がいた気がする。

不用意な発言は気を付けた方が良いな。

「全く、そんなのえっちゃん達から貰えばいいじゃないか」

「うわあ、ナチュラルにクズな事を言ってますよ」

「まったく、しょうが無いなカズマは……」

「えっ、なんでダクネスはちよつと嬉しそうなんですか？正直、引きます」

頬を染めるダクネス、それはねドMだからさ。

たぶん将来を想像してハアハアしてるんだろう。

それはそれとして、残念ながらそれは出来ないのである。

「残念だけど、それは出来ないのです」

「なんでだよ、えっちゃんは女神だろ！人間が大好きなんだろ！その慈愛で養ってくれよ」

「養いたいけど、うちのナナシちゃんがドーピングアイテム用にお金は管理してるから」

「お小遣いを管理される子供かよ……」

「仕方ないんだ、食べれば筋力とか俊敏とかスキルとか上がるアイテムがあるから仕方ないんだ。」

基礎ステータスが上がるならって、買っちゃうんだ。

その為には、お金はいくらあっても足りない。

そう、課金することを強いられるのである。

「その例のナナシちゃんはどこに行っただ？」

「グリフォンとマンティコアを殴って50万エリス手に入れてくるって言ってた」

「おい、死ぬぞ。一撃でも食らったら死ぬぞ」

本人曰く、当たらなければどうということはないそうである。

大丈夫サポーターとして荷物持ちの人がいるから、最悪遺体の一部さえあれば回収されるので問題ない。

でえじょうぶだ、アクア先輩がいるから死んでも蘇られる。

「あ、これなんていいじゃない!」

暫くすると、アクア先輩が依頼書を剥がし持ってきた。

「湖が汚くてブルータルアリゲーターが住み着いて困っています。湖の浄化をお願いします。湖が浄化されるとモンスターはどっかに行くので討伐はしなくてもいいです。湖の浄化なんて出来るのか?」

「ふん。バカね。私を誰だと思ってるの?と言うか、名前や外見で私が何を司る女神かぐらい分かるでしょう?」

「宴会の神だろ?」

「違うわよ!この髪を見て分かんないの、水色の髪!水の女神でしょうが!」

「えっ、もう一回言ってくれるか?」

カズマさんがアクア先輩に近付き耳を向ける。

「水色の髪、水の女神アクア様でしょ!」

「もう一回」

「水色の髪、水の女神アクア様でしょ！この距離よ、なんで聞こえないの！」
「水色の髪、水の女神アクア様でしょ！の所が聞こえなくて」

「聞こえてるじゃ無い！うわあああああん、カズマがいじめるうううう！」
そのやりとりに私は大爆笑である。

でーん、私アウトー。

なお、異世界人であるダクネスとめぐみんは普通に慰めていた。

でもよく見て、アクア先輩の顔が計画通りって感じになってるよ。

「つたく……うん、待てよ。おいアクア、触れるだけで浄化できるんだよな」

「会ったり前でしょ、私を誰だと思ってるのよ」

「よし、俺に良い考えがある」

「カズマさん、それってダメな奴だと思うの」

「いいわ、その良い考えとやらを教えなさい！」

「ええ……先輩が乗り気とか、ますますヤバそうだよお」

その予想はあながち外れでは無かった。

ギルドで檻を借りた私達は、湖に向かっていった。

「ねえ、なんだか出荷される豚のような気持ちなんですけど」

「気のせいだ」

「待って！ねえ、出して！出してよ、私は女神よ！」

「お前のためだから」

「そうそう、そうよねって騙されるわけ無いでしょクソニート！」

湖に向かっていている間、アクア先輩は何かを察してか暴れていた。

確かに、これから向かう湖の現状を知っていたら行きたくなくなることに間違いない。

きつと野生の勘で気付いているのだ。

「着いた………のか？」

そこに広がる光景に、カズマさんは絶句していた。

汚染されたことでブルーアルリゲーターが増えたとは聞いていたが、まさかここま

でとはと思うくらいに汚染されていたからだ。

だが、そんなことに絶句していたのでは無い。

絶句した理由は、湖の中を徘徊する何者か達にだったのだ。

ガスマスクのような物を被り、作業着のような物を着ている。

まさに業者さんと言う格好だった。

そんな奴らが複数人いる。

噂の頭のおかしいアクシズ教徒だろうか。

彼らの一人が湖の外から弓矢で攻撃し、怒った一匹は群れから離れて陸に上がる。陸に上がり、威嚇するように行動した瞬間に斬りかかれ、首を切断される。

その死体を複数の集団が慌てながら回収し、回収している間に其奴は次の獲物に攻撃する。

首を切断した人物は再び弓矢を取って、モンスターが移動している間に回収するといふ無駄を省くために行ったのだ。

撃つ、引き寄せる、斬る、回収する。

この四工程、その人物達の背後にある荷馬車にはモンスターが積み重なっていた。

「なんて無駄に洗練された無駄のない動き」

「あれ、ナナシちゃんだ」

「ですよ、なんかグツタリしたグリフォン見えた当たりから怪しかったんだよな」

なんでそんな駆除業者のような格好をしているのかと疑問が付きにくいカズマだったが、一旦それは横に置くことにした。

たぶん、なんか効率が良いんだろう。アイツは効率ばかり求める奴だったよと勝手に納得する。

実際には、道中の雑魚モンスターを狩るために毒煙を使うため、そういう格好だったので間違えでは無い。

「狩りをするって聞いて徒歩で来た。みんな、丸太は持ったか！」

「最初の挨拶がそれってどうなんだ？あと、持ってねえよ」

「そんな装備で大丈夫か？」

「あつ、終始ネタに走るのな」

初期のナナシちゃんと違うのはしょうが無かった。

日々の戦いが彼女を変えてしまったのだ。

今ではただの戦闘民族である。

レベルが上がるのが楽しすぎる感じなんだろう。

「ところで、なんなんだその格好は」

「ガスマスクと作業着だよ」

「そうじゃなくて、なんで着てるんだよ」

「雑魚除けには毒ガスが一番、この手に限るんだ」

何を馬鹿なことを言ってるんだという感じの態度だったが、逆にお前は何を言ってるんだと思った。

まさか効率を求めるが故に、毒を扱うのは予想外だったからだ。

そんなことをすれば生態系とか諸々にダメージが行くでは無いか。

「遺憾の意である」

「えっちゃん、これはコロナラルダメージだ。悪いのは魔王って奴なんだ」

「な、なんだってー!」

「おい、その二人。茶番はやめろ」

カズマさんが、すごく嫌そうな顔でナナシちゃんを見ていた。

はて、いったいどうしたのだろうか。

「俺の予想が外れて欲しいんだが、まさかこの湖が汚れたのはお前の仕業じゃ無いだろうな」

「何を言ってるんだ。確かに、土砂の流入があつたりしたが大体は湖に散布した毒のせいでだよ」

「そうか、土砂が原因で……いやいやいや、違うそうじゃねえ! やっぱり、お前が原因かよー!」

「待て、私が来た頃には汚染されていた。汚染されていた物を汚染しても、汚染している事実は変わらない。つまり、私はエンカウント率を向上させただけで、出現条件を満たしたわけじゃ無い!」

「ダメだコイツ、はやくなんとかしなくちゃ。クリエイトウォーター! フリイイイイズ

！」

カズマさんが初級魔法からのフリーズがナナシちゃんを襲う。

身に纏っていた服が濡れ、冷風によってピキピキ固まっていく。

「や、やめろ！私は悪くねえ！」

「悪いに決まってるんだろ！俺の勘が言ってる、俺の邪魔をお前がするってな！」

「環境浄化反対！モンスターを保護せよ！」

「うるせえ！俺は綺麗にするんだよ！」

ダクネスがスゴイ防御力なのにおっぱいは固くないように、ナナシちゃんは筋力のステータスが高いが普通の時は攻撃力は普通である。

この世界の不思議な法則のせいで、ナナシちゃんは抵抗できない。

素の力で氷を砕かないといけないのだ。

「殴れさえすれば、ステータスの恩恵でなんとかなるのに」

「当たり前だよな！日常生活で苦労しないんだから、攻撃さえさせなければ問題ないと思ってるんだ！」

「覚えてろおおお！へつくち！」

おお、ナナシちゃん凍ってしまうとは情けない。

魔劍の勇者に容赦を

「わ、わあああああああああ！ピュリファイケーション！ピュリファイケーション！ピュリファイケーション！ピュリファイケーション！カズマさん、カズマさん、カズマさんあああああん！」

「おいアクア、トイレに行きたくなったりヤバそうになったら言えよ」

「ヤバいから！速く引き上げて！ピュリファイケーション！ピュリファイケーション！わああああ！」

湖の中でアクア先輩が叫んでいた。

彼らは本能で理解しているのだ。

自分たちの生存に邪魔な存在である、水の女神を理解していたのだ。

汚れた環境でしか生活できない、そんな彼らにとつてまさに女神とは天敵だったのだろう。

がんばれアクア先輩、負けるなアクア先輩。

「カズマさん、カズマさんあああああん！」

「なんだ、トイレでも行きたいのか？」

「そんなわけ無いでしょ女神はトイレなんて行かないから！良いから引き上げて、速く

引き上げて！ピュリファイケーション！ピュリファイケーション！ピュリファイケーション
！」

「一昔前のアイドルみたいなこと言ってるじゃねえよ」

「やれやれと呆れるカズマさん、その横でめぐみんが紅魔族はトイレ行かないとか言っていた。」

「まったく、小学生でもあるまいし別に恥ずかしがる事でも無いだろう。」

「ウンコしない女子はいません、だってスカトロプレイが出来なくなるからな！」

「エロの女神的にこの主張を曲げるつもりは無い。」

「よし、今度日帰りじゃ無いクエストをやるでしょう」

「紅魔族はトイレに行きませんが、それはやめておきましょう」

「私もトイレ行かないよ。そういうスキルがあるからね」

「なにそれスゴイ」

「腐つても墮落を司るのである。」

「墮落を支援するスキルの中には、トイレに行かないという物もある。」

「食事を取らなくても生きていけるスキル、空腹を覚えないスキル、睡眠が無くても平気なスキル、任意で眠ることが出来るスキル、これでネットゲ廃人に誰でもなれる。」

「煩わしい睡眠や食事にトイレの時間などは無くなり、ゲームという生きる上で必要性

の低い娯楽に時間を使えるのだ。

まさに墮落である。

「ワニは嫌、ワニは嫌、ワニは嫌……」

「お、おいアクア。みんなで話し合ったが報酬は全部お前にやるから、元気出せって」

「……行って行つて」

「えっ？」

「檻の外の世界、怖い……このまま街に連れてつて」

新たなトラウマを手に入れたアクア先輩は、檻に入れられたまま運ばれていた。

周囲の視線が冷たい物だが、まあ慣れた物である。

こうして、私達のクエストは終わりを告げたのだった。

「るーるー出がらし女神が運ばれてくーよー」

「おいアクア、もう町中なんだからやめてくれ。ボロボロの檻に膝を抱えた女の時点でヤバいんだからな。というか、いい加減出るよ!」

「嫌……この中こそ私の聖域よ。外の世界は怖いから、しばらく出ないわ」

以前の俺のようだとカズマさんが悲しい眼をしていた。

可愛そうに、でも引きこもることは悪いことでは無いと思うのだ。

時間を無駄に使っているだけだから、別に犯罪では無いよ。

他人に迷惑は掛けているけど、仕方ないことだよ。

「やめろ、そんな優しい眼で見えるんじゃない！俺は、俺はああ」

「か、カズマ一体どうしたんですか！カズマまでおかしくなってますよ」

「そうだぞ、頭のおかしいめぐみんに心配されるなんてよっほどだぞ」

「おい、今私の事を頭のおかしいと言わなかったか？」

「い、言っていない」

じいーつと見てくるめぐみんに視線を反らすダクネス。

つい本音が出てしまったのだろう許して欲しい。

「その辺にしなさいよ、争っても仕方ないでしょ」

「なんだこの綺麗なナナシは」

「私の知ってるナナシじゃないです」

「よし、文句があるなら拳で語ろうじゃ無いか」

何と言うことでしょう、カズマさんが優しさに触れて苦しんでいるせいでパーティーに不和が広がっていた。

誰が原因だ、まったく酷いことである。

それはそれとして、私のスキルがラブコメの波動を感知している。

なんだこのラ波感……

「女神さまあああああああ！」

「きやあ!？」

「おいおいマジかよ」

私の感知をすり抜けるように、変な人が檻に縋り付いた。

そして、そのまま檻をこじ開けるように広げるでは無いか。

スゴイ、高ステータスだ。なんか強い人に違いない。

「何をしてるんですか女神様、こんなところで」

「おい、私の仲間に気安く話しかけるな。貴様、何者だ?」

「おい、ダクネスが騎士っぽいことしてるぞ。ところでお前の知り合いだろ、女神とか

言ってるし」

「……女神?」

「そうだよ……うん?」

カズマさんとアクア先輩の間に沈黙が訪れる。

ざわざわ……ざわざわ……。

なんでお互いに黙ってるんですかね。

「そ、そうよ!女神!私は女神よ!よっ、こっ、うわはあ!?!うへえ……」

アクア先輩は意気揚々と、転けながらも檻を出す。

そして、胸を揺らしながらドヤつとしながら言った。

「さあ、女神の私に何のようかしら？……アンタ誰？」

「僕ですミツルギキョウヤですよ！ 貴方にこの魔剣グラムを貰って転生したミツルギキョウヤです」

「えっ？」

「えっ？」

「あー、いたわねそんな人もごめん忘れてたわ。結構な数を送ってたし忘れても仕方ないわよね」

先輩の素直な所は美点だと思うが、時に真実は人を傷つけるということを私は学習した。

ほら見ろよ、握手会で露骨に嫌そうな顔された時のファンみたいな顔に魔剣の人がなつちやつたよ。

女神に夢を抱きすぎたんだろう、可愛そうに。

「ところで、どうして女神様は檻の中に閉じ込められていたんですか？」

それには深い事情があるので、アクア先輩がなんやかんや説明して上げた。

だが、本人が出たがらなかった事を伝えなかったのはマズかった。

その結果、魔劍の人が叫び始めたからだ。

「はあああああ!?!この世界に女神様を引きずり込んで、そのくせ檻に入れて湖に浸けた!?!君は何を考えているんですかあああ」

「ちよつと、私としては結構楽しいしもうこの世界に連れてこられたことも気にしてないんですけど」

「アクア様、この男にどう丸め込まれたか知りませんが、貴方は女神ですよ」

端から見ると女の取り合いである。

まあ、事実ではあるので否定は出来ない。

「ちなみにアクア様は今どこに寝泊まりしてるんです」

「えつと、馬小屋で……」

「おい、いい加減離せ!礼儀知らずにも程があるだろう!」

ダクネスに言われて渋々胸元を掴んでいた手を離す魔劍の人。

いいなあ、私もああいう熱烈な信者が欲しいな、チラツ。

「おい、私を信者にしたくば有用性を示したらどうだ」

「私の信者になると不眠不休で飲まず食わずで活動できるようにするよ」

「どうしてそれを先に言わなかったのよえつちゃん!私、信者になるわ」

「この手のひらくルーである。でもやったぜ」

早速、淫蕩と墮落の聖職者にしてやろう。

なんだろう、スゴイ破戒僧みたいなパワーワードである。

エロくてだらしない聖職者って、響きが溜まらなくヤバイ。

「クルセイダーにアークウィザード、それにモンクと上級職ばかり、君はこんな優秀そう
な人たちがいるのにアクア様を馬小屋に寝泊まりさせて恥ずかしくないのか」

「えっ、私は？ウィザードの私はスルー？」

「初期職とか、ガチ勢として恥ずかしくないんですか？」

「うおい、まさかの信者からの追い打ちだよ。そこはフォローしようよ」

「君達、これからはソードマスターの僕と一緒に来ると言い。高級な装備品もそろえて
上げよう」

ざわざわとカズマさんのパーティーが話し合う。

何と言うことだ、あつちはまともな反応をしている。

でもウチのナナシちゃんは眼をキラキラしていた。

おい、まさかお前……

「カズマ、私はこの人と一緒に行くことにした。なに、止めてくれるな」

「ああ、うん、そうか分かった。お前の考えていることは何となく分かった」

「さあ、君達も一緒に」

「よし、お前ら集合」

カズマさんが何を考えているか分かったが、頑なに先輩達は同意しなかった。

私もそつちに残りたい。だから、離そうよナナシちゃん。

「どこに行こうというのかね、君の才能が私には必要だ」

「嫌だよ、あつちの人達見て！踊り子みたいでしょ、キャラが被ってるんだよ！私の格好と同じなんだよ」

「服は性能です、ファッション性なんていらぬ。偉い人にはわからんのですよ」

「やだよ、ナチュラルに私だけ仲間はずれにしたの絶対に許さない。絶対に絶対にだ！」

「こういう調子乗ってるイケメンが嫌いだって、私思い出した！私の中のゴーストが囁くんだ、リア充爆発しろってな。」

「説得はしたが、俺のパーティーは貴方に着いていきたくないようだ」

「ならば決闘だ」

「あつ、これ話聞かないタイプだ」

「負けた方が、相手の言うことを何でも聞——」

「よし乗った、ステイイイル！」

「ちよ!?!」

「ステイール！ステイール！ステイール！ステイール！」

次々と装備が外れていく。

最初に剣を、次に鎧、インナーも取られていく。

おやおや、防具は装備しないと意味が無いぞ。

「チツ、もう無理か。クリエイトウォーター！」

「や、やめろ！無抵抗の人間に、何をするんだあ！」

「おい戦えよ！股間なんか隠してないで、掛かってこい！フリーイイイズ！」

「さ、寒い!?わ、分かった！僕の負けだ、だから装備を返してくれ！」

「何言ってるんだ。ドロップアイテムは俺の物だろうが、馬鹿かよ」

そう言つて、カズマさんは奪ったグラムを振りかぶつて叩き付けるのだった。

勇者は目の前がまっくらになった。

ハーレムパーティーに悟りを

カズマさん達と分かれた私達は、魔剣の人のパーティーに参加していた。

あの後、布の巻頭衣を着せられた状態で逃げ帰った魔剣の人は絶望に打ちひしがれていた。

タダ幸運だったのは、まだ資金があったことだろう。

「クレメア、フィオ……と言うわけで新しいメンバーだ」

「よろしくね」

「よろしくう」

初期装備になった魔剣の人のパーティーに紹介されると敵意の籠もった視線に晒される。

えっ、なんでラブコメなの？ここだけ、世界観が違うんだけど。

「アンタがどういう理由で入ったかは知らないけど、簡単にいくと思わないでよね」

「そうよ、私達の方がキョウヤと一緒にいる時間は長いんだからあ」

「はあ、そうですか……とところで、職業は戦士と盗賊との事ですがそんな職業でやっていけるんですか？どうして、ジヨブチェンジしないんですか？もしかして、レベルが足り

ないとかそういう理由ですか？それってつまり、戦闘は全て任せているって事ですよね。これだけの貯金があると言うことはそれなりのクエストに参加しているはずなのに、全てを任せて自分たちは参加していないって言うのはパーティーに参加している意味があるんですか？寄生プレイとかやる気を感じられないんですがその点はどういうつもりなんですかね？」

「……………」

ナナシちゃんの素直な疑問が彼女達にクリティカルヒットしていた。

でも、彼女達は冒険者である前に女の子である。

冒険より恋が忙しいのだろう。

「冒険よりエッチなことの方が好きなんだから仕方ないんだよ」

「べ、別にそんなんじゃないから！嫌いって訳じゃ無いけどね」

「私達はそんなことしないし！まあ、私達のペースってあるし」

「はあ？えつ、いつ死んでもおかしくない冒険者なんてやってるのに何を悠長なことを言ってるんですか？別に、欲望は悪いことでは無いんですよ。好きな人と結ばれたい、自分だけを見て欲しい、側に居たい、その思いは尊いことだって分かってますか？気持ちを書きだしたいと考え、注がれたいと考え、その心の全てを与えて受け入れたい、それを

他人に渡したくないと思うことは間違ひでは無いのです。なぜ、愛さないんですか？」

可愛らしい人の子達に私は女神として久しぶりに働きたくなってきた。

そう、言うなれば興が乗ったのだ。

可愛そうだから助言してやろう。

「愛は有限のリソースでは無く、無限に存在する物。その愛を奪い合う必要はありません。水槽の中にある二つのコップが好きの人と恋敵だとしたら、貴方の愛は注がれる水のような物です。片方のコップにしか注げないというのが間違ひなのです。注ぐのを躊躇っているだけで、溢れるほどに愛すれば良いのです。さすれば、いつしか愛は溢れて水槽を埋め尽くす事も可能でしょう。その時、空である恋敵のコップにも水は注がれています」

「な、何を言ってるのよ……よく分からないけど、何だか凄みがあるわー」

「仲間が居るからと進むことを躊躇う必要はないのです。迷わず進みなさい、その果てに仲間すら愛しなさい。自分と同一の存在などいないのだから、一番近い場所でお互いを理解するのです。貴方達が愛を育み、理解できず邪魔をする者がいたならば、その者すら汝は愛しなさい。さすれば、同じ愛の元に一つとなる事が出来るのです。争いも無く、愛だけが溢れる世界に貴方達が導くのです」

私の後光すら漏れ出る姿に、ナナシちゃん以外の三人が訳も分からず跪いていた。

まさか、辻説法なんてするとは私にも神らしい姿があったらしい。

「で、ぶつちやけどういこと？」

「一回やってしまえば、後は二回も三回も同じだし、3Pでもすれば問題ない。邪魔する奴は混ぜて乱交してしまえば、同じ穴の貉、いや寧ろ兄弟姉妹。『自主規制』だけしてたら、世界は平和だよ」

『『自主規制』したいオークとか、『自主規制』で生活してるサキユバスが信奉する気持ちが分かったわ。そして、分かってしまった自分が信者として思想に浸食を受けているという事実も認識したわ。やっぱ、邪神だわアンタ。いつか愛の為に人類滅ぼすわ』
「なんで!？」

馬鹿な、そんな人類全てを愛してる私が滅ぼすなんてするわけないじゃないか。
せめて、私の中で一つになろうとかそんなのである。

神として私は人類を愛している。

だから、私は人類に愛されたいのです。

地上の人々の、快樂の受け皿になりたいのです。

生きているすべての生き物の欲望のはけ口になりたいのです。

最大多数の最大幸福、つまり私のあり方は人類に対する慈愛である。

「今、確信しました。貴方はアクア様と同じ女神なのですわ」

「見て、ほら見て！分かる人には分かるよ」

「アンタ、許さないとか言つてなかった？チヨロすぎない？」

「愛の前には一時の悪感情も関係ないんだよ」

私の中のゴーストが、やめろ、やめてくれえええと苦しんでいる。

しかし、数十年だけしか生きていない男の残滓よりも女神としての一生の方が長い。

つまり、女性としての感覚の方が大きいのだ。

その上で判断すると、中身はダメだけどイケメンだし、寧ろダメな所が良いというか

私がいないとダメそうな感じが溜まらなく愛おしい。

ダメな子ほど可愛いし、ダメ人間って母性本能が擦られる。

神にとって人類は子供のような物、そうこれは肉欲では無く母の愛。

つまり、私がこの男とゴールインしても良いのです。

神は許します、だって私が神だから、私がゴーサイン出してるから！

「ダメだコイツ、トリップしてやがる」

「ハツ……どうして服を着てるんだ？」

「おい、自重しろ。ホテルに行く前に装備を買い揃えよう」

ナナシちゃんの言葉に、他の女性陣二名がギラギラした目で同意する。

たぶんその方向性は違うと思うのだが、本人達が言うなら仕方ない。

「ほ、本当に買うのか？こ、こんなに同じアイテムいらんないんじや」

「必要な物だから、それに装備を整えないと冒険に出られないぞ」

「良いじゃ無い、今まで頑張っていたんだし少しくらい休憩しても」

「そうよ、たまには冒険を忘れてこういうのも良いじゃ無い」

「待ってくれ、なんだその鞭とか縄、冒険の武器だよ！そうなんだよね！」

「見てみてキョウヤ、この蠟燭とかきつと洞窟で役に立つわよ」

「見てみてキョウヤ、このローションとか逃げるときに役に立つわよ」

ナナシちゃんの要望をアシストするように、他の二名が商品を持って詰め寄る。

彼女達は理解しているのだ、ここで碌な装備が揃えられなくなったら雑魚モンスターを狩る必要が出てくる。

そうすると、彼のやる気はガクツと下がり、危険の少なく時間の掛かるクエストばかりの日々になると。

その分、秘境などでドラゴンと戦うことなどなくなり、始まりの街で少しずつ装備を整える毎日がやってくる。

そして、その時間を二人で使うことが出来ると理解しているのだ。

「待ってくれ、僕の今持つてる装備より高いじゃ無いか！」

「ねえ、また稼げば良いじゃ無い。ふふつ、そして新しい冒険をするのよお。私、貴方の

お話聞きたいなあ……聞かせて、ねえ？」

「ま、まあ稼げば良いんだし、そうですわね女神様」

「うふふ、坊や良い子でちゅねえ〜」

「おい、それ以上は要求してないからやめろ」

抱きついてきた私をナナシちゃんが無理矢理離して、連れて行く。

そんな、あつちはあつちでこれから宿屋に行つて新装備を試す（意味深）予定らしいのになんてことだ。

「ほら行くわよキョウヤ」

「そうよ、そういうプレイは私達もしてあげるから」

「待つてくれ何の話、ちよつと待つてー！強い、はな、離してくれ！ああ、女神様あああー！どこに行く気ですか女神様あああー！」

「ああ、私の太くて遅しい『自主規制』が遠ざかっていく。やだやだ、私も宿屋で『自主規制』するの、私の『自主規制』を『自主規制』で滅茶苦茶にして、しゅごいのおおこの『自主規制』つて言つたりするのとおお！」

「往來で叫ばないで貰えますかね、流石に恥ずかしいんですけど」

高級装備に魂を売つた女のの前では私は無力だったよお。

「はあ……休みてえ。もう、しばらく何もしたくねえ」

「じゃあ、宿屋で休憩」
「しない」

このリッチーに浄化を

目の前で微笑む女性に、私は上京した若者が久しぶりに会った両親と何を話せばいいのかわからないような気まずい雰囲気になった。

女性の方も微笑しながらわたわたしている。

ナナシちゃんはそのような私達を無視して爆発するポジションなる物を物色していた。

「こんにちは」

「こんにちは」

「……………今日は良い天気ですね」

「雨ですけど、アンデッド的には良い天気なんですネ」

「……………」

「……………」

気まずい、ただただ雰囲気が悪い。

ウチの信者が鼻歌交じりに買っているせいで、私は気まずい。

なんで、馴染みの店の店主がアンデッドなんだよ。

「どうした、いつもならセクハラの一発かましてる頃合いなのに大人しいじゃ無いか」

「これはリッチーなの、正直生理的に受け付けない」

「うん？元は人なのだろう、滅せることが出来るから生きてるか死んでるかの違いじゃ無いか」

「あの、そう言う考え方もどうかと思いますけど。あと、生理的に受け付けないんだ……」

へうっ、と変な声を出しながら萎れる店主。

店主の名はウイズ、氷の魔女と恐れられた冒険者だったリッチーらしい。

あの雑魚であるベルディアに死の宣告を受けた結果、仲間達が呪われてしまい、それを解除するべくリッチーとなって効率厨となったあげく、攻略組かっつくらしいの勢いでラスボスと戦って、今では仲間達が来るのをアクセルの街で店をして待っているとのことだ。

なお、仲間の呪いは解けた模様。

まあ、人間レベルだと解除できないのは当たり前であり、つまりは魔法は無効化するモンスターだぜとか言っただや顔してたオッサンに、オラ人間レベル以上の魔法だゴラア、そんな魔法を無効化するはずなのに、知らなかったのか低レベルの魔法以外無効化できないぜ、みたいな感じのやりとりをぶちかませなかったのが原因だ。

今回は、人間程度じゃ解除出来ないぜとドヤ顔するベルディアをアクア先輩という

チートでゴラアとぶん殴ったかのように解呪してやったわけだがな。

そう考えると、もうちよつと遅くベルディアと戦えば良かったのだが、こればかりは運が悪いと思われる。

「うん、まあ、例えばゴキブリを見てキヤーとなる人がいるでしょ、それが女神。ゴキブリを見て、無言でゴキブリだつて固まるのが私、みたいな」

「ゴキブリ……私、ゴキブリ……」

「おい、ゴキブリとか失礼だろ！」

「ナナシさん？ いいんです、私……」

「叩いたら死ぬ程度のステータスの低さじゃないか。そこは、寄生虫のような悪魔と評するべきだ」

「あれえ〜?」

私の説法によってナナシちゃんも悪魔は寄生虫と認識していたようだった。

それはそれとして、ウィズが分かんないよつて顔で困惑していた。

それはもう、たゆんたゆん、ぼよんぼよん、ふわふわもちもち、な感じの物を机に押しつけてだ。

なにこのリッチーエロい。

「あ、あのどうして私に抱きついて……ひゃあ!? ちよつと、触らないで」

「まあまあ、まあまあ」

「本当にあああああ、温かいのがいっぱい……身体が、身体が溶けちゃう！逝っちゃいます、私逝っちゃう！」

「おいやめろ、身体が透けてるだろ触るんじや無い」

その魅惑のボディに誘惑されて、綺麗なクツションにわーいつてしてたらリッチーの身体が蒸気を発してしまった。

蒸気の出る乳マスクか、流石だなどか思ってたのだがどうやら触れた場所から浄化されていたらしい。

なるほど、私もアクア先輩ほどでは無いが触れるだけで浄化が出来るらしい。

エロいことをすれば悪いところが全部無くなるとは、流石エロの女神様だけあるぜと自画自賛である。

「なん……だど!？」

「どうしたのナナシちゃん」

「コイツを見てくれ」

「すぐ……コタツです」

ナナシちゃんの指差す先には普通のコタツがあった。

普通のである、産廃しかないと噂の店に普通のコタツである。

まさか、乗ったら動き出すとか言うオチじゃないだろうな。

「そ、それは冬に使える暖房器具のはずが、一度入ると出ることが出来なくなってしまう捕獲用のアイテムです。英気を養って冬も仕事をする冒険者を増やそうというコンセプトで作られたのですが、買った人は冬に歩かなくなってしまう悪魔のアイテムです」

「やつぱりコタツだ!」

「ふむ方向性としては、ある意味産廃なのか。本末転倒なところは他の商品に通じるこ
とがある、勿論買いだ」

まさに墮落にふさわしいアイテムである。

ナナシちゃんは、買わない方がいいですよというウイズの言葉を無視して即買いであった。

それにしても、これをダメなアイテムだと思ってしまうウイズは真面目なのかそれとも商才がないのか。

「あううう……まだ、身体に残ってる……」

「へい」

「ほわっ!?!やめて下さい、消えてしまいます」

タッチするとプスプスして湯気が出るから楽しくてついである。

やっぱりおっぱいは偉大だ、君はゴキブリからテンガに格上げしたからな。

「おい、それくらいにしてあげなさいよ」

「アンデッドは人権がない、つまりエロいこととしても犯罪じゃ無いんだよ」

「やめて下さい、死んでしまいます」

アンデッドでも発情するのとかか試したかったのだが仕方ない。

ヌルヌルにただけで昇天して、消え去りそうだからこれぐらいにしといてやろう。

「それにしても、ナナシさんが街にいるなんて珍しいですね」

「今は冬だし、モンスターいないなら狩らなくてもいいかなって」

「やっぱり珍しいですね」

「なんで!？」

気付いてないかもしれないが、今までのナナシちゃんなら外に行ってたと思う。

冬將軍とやらがいるらしい、レアモンスターだ、負け確定イベントだったよ、このワ
ンセットくらいやってのけそうである。

そんなことをしてるのは今のところアクア先輩達だけで、働いてないことは珍しい。

休むことを、強いられるんだ！

「そんな筈は……あれ、でも、あれ?」

「まあまあ、まあまあ」

「たまにはいいのよ。明日から頑張るわ」

取りあえず、買ったコタツを持ち帰ってぬくぬく過ごすことにしたのでした。

コタツを運びだそうしていると、来客があつた。

「ごめんください、ウイズさんはおりますか?」

「はい、おりますが」

「ああ、良かった」

その来客は、不動産屋さんだった。

なんでもウイズに除霊を頼みたいそうだ。

払っても払ってもすぐ幽霊が集まるから困っている不良債権らしい。

「私に良い考えがある」

「えっ? 誰だアンタら」

「除霊してしんぜよう。何を隠そう、ここにいるお方はモンクである」

「えっ? いや、ウイズさんに」

「まあ、それは良い考えですね」

「えっ? ちよつと、ウイズさん?」

よし決まりだな。

ということ、おねだりの末に除霊する報酬として屋敷を手に入れることが出来た。なお、女の子の幽霊が出るらしい。森の洋館かな、ポケモンを思い出すぜ。

屋敷にやってくると、本当に幽霊だらけだった。

「破あー！」

「聖職者つてスゴイ」

ナナシちゃんが屋敷に入ってから幽霊を殴って始末していた。

殴れば倒せる、真理だ。

「それはそれとして、新居だからね。お供え物しておこう、勿論のことだが私宛に」

「それ、ただの夕食じゃね？」

「今もこうして集まってくる幽霊を除霊している私を敬うべき、そうすべき」

「追い払ってるのが私な件」

細かいことは良いんだよ。

それにしても部屋が多いな、これはカズマさん達を招待するのも各かでは無いのではないだろうか。

アクア先輩、馬小屋で過ごしてるしな。

言わないとどうせ押しかけてきて怒ってくるだろうし、先に此方から言うって作戦だ。

なお、アクア先輩はギルドで雪精片手に泣いていた。
また泣いてるよ……。

負け確定イベント、相性ゲーとか糞だわ

ワーニング、ワーニング、その日はまたかよという感じでギルドで緊急招集が掛かっていった。

「デストロイヤー警報、デストロイヤー警報！」

「カズマ、逃げるわよ！ さっさと逃げるの！」

「よし、みんな必要な物は持ったな。逃げるぞ」

ギルドではワーワー言いながらみんなが右往左往していた。

ああ、悲しいけど敗北確定イベントがやって来たようだ。

なんでもすげえロボットがやってくるらしい、デストロイヤーとか機動要塞とか強そう。

「皆さん、良く集まってくれました。現在機動要塞デストロイヤーは街の北西側からゆっくりと進行しています」

「取り敢えず、大樽爆弾を仕掛けよう。何、カニのようなモンスターならたくさん狩ったことがある」

「モンハンみたいなこと言ってるけど、ナナシちゃんつてば裸装備だからね」

「当たらなければ問題ないから、大丈夫大丈夫」

ギルドでは、デストロイヤーに対する作戦会議が行われていた。

マジ無理ゲー、そんな強敵駆け出し冒険者の街に来ちゃダメだろう。

「ええい、こんな所にいられるか。俺達は逃げさせて……おい、ダグネスどうした？」

「カズマ、悪いが私は残ることにする」

そんな死亡フラグなことをカズマさんが言っていた。

勝てないには挑まない、愛国心？ 始まりの街にあるわけねえだろと言わんばかりだ。

聞き耳を立てるとどうやらパーティーで意見が割れているようだった。

「おい、流星のお前もデストロイヤーに殴られたら死ぬぞ。いい加減、その変な性癖治せ」

「カズマ！ 貴様、よもや私がこんな時まで欲望に忠実だと思ってるのか」

「思ってるよ、当たり前じゃん」

「なっ……！」

プルプル震えるダクネス、どんまい。

でも、そう思われる事例が君には多すぎると思うんだよお。

しかし、それでも残る理由は別にあるようだ。

「いいか、カズマ。私の本当の名はダステイネス・フォード・ララティーナという」

「なんだその名前は、ダクネスの癖に生意気だな」

「どうして、お前という奴は、息を吸うように、罵倒してくるんだ!」

「それで、ララティーナは領主の娘とかそんなんで守る義務がうんちやらかんちやらかなの?」

「貴様、エスパーか!」

「はいはいテンプレ乙」

呆れるようなカズマさん、そんな彼が選ぶ決断をピピピツと私は予想できた。

何だかんだお人好しな彼はきつと残るだろう。

それに、と私はシリアスな雰囲気の中で私の信者達を思い出す……。

『ああ、もつとです!もつと、もつと!』

『うくん、フヘヘ』

『こんなに濃ゆいのがたくさん、ウフフ!』

あかん、碌なもんじゃなかった。

男性冒険者に夜這いしているとところやないの。

うくん、でもきつとこれは天啓に違いないと思うの。

『聞こえますか、私は貴方に直接語りかけています』

『この声は、またこのパターンか』

『届け、私の思い！君に届け！』

『な、なんだこの映像は……』

説明しよう、私はまばたきを我慢出来る間、脳内に声だけでなく映像も送り届けられるのだ。

サキュバスの映像を、送り込めるのだ。

『ここは、店？おお、サキュバスのお姉さん。あれ、なんか様子が……ストリップだ?!』

『私が店に行った時の記憶です』

『何故に、行ってるし』

『言わせんな、恥ずかしい』

ヤルことは一つだろ、おおん？

まあ、そんなことは良いのです。

『ぬ、脱ぐ！夢の中でしか見れなかった、想像でしか補完できなかったあの姿が、見える。

これが、サキュバス補完計画とでも言うのか』

『残念ですが、ここから先は有料です』

『ま、待ってくれ！あと少しで、あと少しで見れるんだ』

『等価交換だろ』

『こ、これが人間のやることかよおおお！』

急に発狂するカズマさん、ギルドの視線が集まりいつものことかと流される。

びつくりしていたのはダクネスだけだ、ビクッとするララティーナかわいいうらララティーナ。

それで、カズマさんは戦う理由を思い出した。

「ダクネス」

「な、なんだカズマ畏まって」

「俺、やっぱり好きだ」

「にや!? にや、にやに言ってるんだ、こんな時に」

「この街を、見捨てるなんて出来ない。俺、気付いたんだ。この街には大事な思い出がたくさんあったんだって」

「カズマ、そこまで私達との思い出を……あと、告白じゃなかったのか」

「だから俺、守るよ。お前もついでに守ってやんよ!」

なお、守るのはサキュバスだって私は知ってた。

あそこだけ切り取るといい感じなんだよな。

「そうですよダクネス、私達に任せて下さい」

「しょうがないわねえ、カズマさんがどうしてもって言うなら手伝ってあげてもいいの

「よ」

チラチラとカズマさんを見るアクア先輩、いい話だな。

なお、ギルドの中ではあんなラブコメ展開を他所に作戦会議が始まっていた。

ふむふむ、デストロイヤーってすごい結果が張られてるのか、無理ゲーだろ。

「こんな時、魔剣の勇者様がいれば」

「魔剣のない魔剣の勇者様とか、ただの無能だしな」

「なんで魔剣無くすんだよ、馬鹿かよ」

憤る冒険者達、いつその魔剣を無くした経緯がバレるか焦るカズマさん。

そんなカズマさんが話題を逸らそうとした。

責任逃れ、流石カズマさん汚い。やることが汚い。

「おお、アクア。お前なら結界を破れるんじゃないのか？」

「えっ？ううくん、やってみなければ分からないわ」

「ほ、本当ですか！ダメ元でもいいので試して下さい！後は、火力さえアレば」

「いるだろ、頭の可笑しいのが」

そう言えば、いたなとみんなが一点を見つめる。

ジーと注がれる視線、それは私達に注がれていた。

正確には私の隣だ。

「おい、待て！それが私の事を言っているのなら、その頭の可笑しいという呼び方は辞めてもらおう！辞めないと言うなら、頭がオカシイということをここで証明してやろう！」

「頭がオカシイことを認めてるじゃないか。それと私は可笑しいはずがない、これでも知力のステータスはそれなりだ」

「ステータスでしか物が考えられないとは可哀想な子ですね」

「一発屋で動けない継戦能力のないウイザードは言うことが違うわね」

「なにおー！」

取っ組み合いの喧嘩を始めるめぐみんとナナシちゃん。

なお、ナナシちゃんの一本背負いが決まって、ぐでーんとしているめぐみんの負けである。

そんな一幕を見ていたら、おっばいが来た。

まちがえた、おっばいではなくリッチーのウイズがやってきた。

これで勝てる、エロースちゃん大勝利な流れがギルドに出来た。

という訳で、デストロイヤー討伐である。

「よし、まずはえつちゃん、デバフを頼む」

「ロボットだから、デバフとか無理ですう」

「なっ……なら、支援魔法で頼む。ナナシは、ダメだな」

「悔しいが、物理が通じないとな。私は、無力だ……」

「使つかえねえ！いつもと違って、役立たず過ぎる！おい、アクア大丈夫なんだろうな
！」

「私が聞きたいわよ、大丈夫なんでしょうねえ！」

「こっちは……めぐみんが緊張して使い物にならなさそうだ」

「大丈夫じゃない!?!」

早速のピンチであった。

ロボット嫌い、アイツら色欲とかないし混乱とかしないし状態異常とか最初から無いとか意味わかんない。

そんな私が出ることと言えば、パフパフだろうか。

「頑張れ、頑張れ」

「わひやあ!?!な、何をするのです」

「ほらく、綺麗なクツションですよ」

「めぐみん、うら……大丈夫そうだな。よし、アクアやれ！」

カズマさんの指示により、ゆっくりやってくるデストロイヤーに向けて、先輩の魔法が放たれた。

すごい、これならきつと勝てるに違いない。

「うりやああああああ！」

「よし、今だ爆裂魔法だ！」

結界が壊されると同時に爆裂魔法が二発同時に放たれる。

やった、第一部完！

「やったか」

「俺、これが終わったら結婚するんだ」

「さあ、返って乾杯よ！報酬はおいくらかしらね？」

「この馬鹿ーどうしてお前はお約束が好きなんだ！」

『被害甚大に付き、自爆機能を作動します』

「ほら見たことかー！」

ど、どうやら私達の戦いはこれからのようだった。